

「日本みやげ」としてのイレズミ

——十九世紀から二十世紀初頭における外国人観光と彫師

山本芳美

一 問題の所在

明治中期から後期、つまり十九世紀後半から二十世紀初頭にかけて、欧米から日本にきた滞在者や旅行者が、イレズミを入れる現象がみられた。施術の拠点は、国際港である長崎、神戸、横浜であり、箱根の富士屋ホテル、東京の帝国ホテルなどでもおこなわれていた。外国人向けの施術は、国内の人々が法的に規制を受けていた時期に重なる。

例えば、一九〇一（明治三十四）年に刊行された田口卯吉が編集した『日本社会事彙 下巻』は、次のように十九世紀末の状況をま

とめている。日本で最初の西洋式事典の記事を、引用してみたい。

今日は法律の禁ずる所なるを以て。公けに業とする者はなけれども。窃に家に在りて業とする者ありて。消防夫。馬丁。理髪職。魚売。車夫。其の他職人社会には満身に刺青する者あり。今は大阪にも大に流行し。方言ガマンと云ふ。開港場の居留地には久しき以前より治外法権を利用して。外人の家に手術所を置き是を業とする者あり。公けに看板を掲げ広告をなせり。又外国に巡業する者あり。横浜の彫千代の如きは有名なる技術者にして。英国皇孫。露国皇太子（今の帝）独国皇孫など。外国人中には紳士貴婦人の施術を利用する者少なからず。外国人向

の刺青業者は針の細きを用ふる故。其の痛み少く。又依頼者の望によりては局部麻痺を施して後施術する故。全く痛みなきを得るなり。今日内国人向の刺青工賃は一切り。即ち依頼者の痛みに耐へる時間を極度として。金三十銭乃至五十銭位なれど。外国人向けのは。数十日を要する手術を行ふをなければ。図様に依りて予め価を定め。三円以上十円位にて。一日又は数日間に行ふなりと云へり（経済雑誌社編一九〇二・一五八頁）。

彫師と外国人が「治外法権」を振りかざしているとは知識人が評するほど、半ば公然と施術がおこなわれていたのである。

従来の研究では、イレズミ関連の広告は紹介されてきたが、広告の効果、広告を出した美術商とイレズミ業の関係や客たちがどのように施術を受けていたのかについては、具体的に検討されてこなかった。本稿では、国内の研究ではほとんど着目されていなかった現象に着目し、十九世紀末に活動した彫師である彫千代（一八五九年—一九〇〇年）と美術商の提携に関連する広告や新聞雑誌の記事、港と仕事場の位置関係、イレズミの大きさや図柄、平均的な施術時間などを分析、考察する。十九世紀末には、道路、交通機関や宿泊施設、電信・電話などの各種インフラが整ったことにより、「快適な日本観光」が急速に発展する。軍艦の寄港に加え、国際定期航路は途切れなく旅客を送り込むようになり、外国人客を取り込むべく

観光業が隆盛する。そうした状況を背景に、外国人客の需要を掘り起こすため、旅行案内書やホテルのメニュー裏などに彫師の広告が出されていた。

明治時代に訪日した外国人観光客がイレズミをする現象は、新聞雑誌記事、旅行者の手記などの同時代資料で散発的に触れられてきた。しかし、研究としては展開されてこなかった分野といえる。日本みやげのイレズミに関する記述としては、作家の飯沢匡が英国二皇孫や露国のニコライ皇太子（当時）のイレズミや横浜の彫師である彫千代について著した『異史 明治天皇伝』（一九八八年）がある。客に関する書籍や論文も、一九九〇年代より国内で刊行されはじめた。一九〇〇年前後に数回来日した博物学を趣味とする英国人ゴードン・スミス（Richard Gordon Smith, 一八五八年—一九一八年）が書き溜めた手記をまとめた『ゴードン・スミスのニッポン仰天日記』（一九九三年）が出版された。本書には、一九〇〇（明治三十三）年三月九日に京都から来た彫師のナカジマ^①にゴードンが会い、イレズミ関係の資料を終日見たと述べられている（スミス一九九三・九三頁）。さらに、米国の詩人H・W・ロングフェローの長男であるチャールズ・A・ロングフェロー（Charles Appleton Longfellow, 一八四四年—一八九三年）の体験を軸に、イレズミをはじめとする日本体験と美術収集、施術の象徴する意味について論じた Christine M. E. Guth による *Longfellow's Tattoos: Tourism, Collecting, and Japan* (2004) も出版された。

日本でも同年に『ロングフェロー日本滞在記——アメリカ青年の見
たニッポン』として、最初の日本滞在に関する手記と手紙類が編纂、
翻訳されている。

異文化交流史も含めた視点を備えた研究は、二〇〇〇年に、歴史
研究が専門の Jane Caplan が編集した *Written on the Body: The Tattoo in
European and American History* があり、計十四名の著者が英米圏のイ
レズミ史、太平洋の各諸島での施術や英国のイレズミブームなどに
ついて論じている。さらに日英交渉史研究の小山騰による『日本の
刺青と英国王室』（二〇一〇年）が出版された。十九世紀の英国・米
国を中心としたイレズミブームと日本人彫師の活動を概観する画期
的な研究であり、後述する横浜で活躍した彫千代についても一章を
割いて述べている。次いで、二〇一二年に Anna Felicity Friedman が、
シカゴ大学に学位論文 *Tattooed Transuburites: Western Expatriates Among
Amerindian and Pacific Islander Societies, 1500-1900* を提出している。
この研究は八十五名の伝記を基に太平洋各地でのイレズミを通じた
交流、交換に着目した研究である。さらに *Global Histories: A Student
Journal* に、横浜という地域に着目して日本みやげとしてのイレズミ
に注目した論文 “The ‘Body-scape’: Performing Cultural Encounters in
Costumes and Tattoos in Treaty Port Japan.” (2017 (平成二十九
年)に発表されている。著者のハンブルグ大学修士課程(当時)の
Hui Wang は日本への留学経験もあり、近年の日本における研究動

向も踏まえている。

当時の国内の主要な客である職人男性は、背中や胸、全身を、浮
世絵を下敷きにした図柄でくるむように彫るのが好みであった。

「額」と呼ばれる主要な図柄を引き立てる雲や波、雷などを彫らず、
人物や神像などの図柄単体で彫るのは「抜き彫り」と呼ばれ、女性
が好む彫り方だとして男性たちは避けていた。日本人の客たちは、
近隣の彫師の仕事に何度も通って仕上げ、図柄や面積が大きいこと
が周囲からも評価された。対して、日本でイレズミを入れた外国人
の客層はグローブトロッター (globe trotter) と呼ばれた有閑階級の
世界漫遊家、英国や露国、奥国ほかの各国の皇族、それに軍人や船
員であり、抜き彫りを好み、小さな図柄でも訪日記念として喜んだ。
これは、上陸記念に寄港スタンプのようにイレズミを彫る船員や軍
人の感覚が反映していた。

当時の日本人の感覚からすれば、外国人向けのイレズミ施術は、
数時間の「体験」めいていた。外国人客が日本みやげとして彫った
図柄の大半は、「日本伝統刺青」と称されるものではない。本論で
は下絵の分析にまで踏み込まないが、当時の下絵や客が書きとめた
施術時間から判断すると、図柄は諸外国の港で彫られていた図柄と
共通している一方で、日本的な意匠も多分に組みこんでいる。軍
艦が多く寄港した長崎や神戸の下絵では着物姿の女性を乗せた人力
車夫の姿などの日本風の図柄なども見られるほか、各国軍旗をアレ

ンジした愛国的図柄が用意されていた。横浜を拠点とした彫千代の下絵では英字を組み合わせたイニシャル、蝶や蜘蛛、蜂、蠅などの昆虫類、動物、虎や鷹などもあった。ただし、これらの図柄は、下絵の大きさや、米国の新聞に掲載されたスケッチ、そして施術時間から推測するに、腕全体や背中、全身に広がるほどの面積で彫られていたわけではない。旅費や滞在期間に糸目をつけられない階層の客は限られ、滞在時間から見て小さな抜き彫りしか彫れなかった、とも言い換えられる。

旅行記や報道に基づけば、大半の外国人客にとって、日本でのイレズミ体験は滞在や旅の主目的ではない。当時は訪日・滞在外国人全般に移動や居住に制限が設けられていたため、彫師へと客を導いたのは、彫師自身の売り込みに加え、ホテルや美術商関連の広告、通訳兼ガイド、別当（馬丁）などであり、特殊な事例では明治政府の高官も関与した。日本でのイレズミ体験は、旅行者が日記や旅行記に数行から一頁程度にわたって記す程度には物珍しさがあつた。日記や体験記、旅行記などで描かれる外国人向け施術は、イレズミが法的に規制されていた時代の「建前」との落差がある。さらに、興味深いことは、施術を所望した外国人客の前にすぐに彫師が現れることである。

法的に規制されていた時代は、彫師は隠れておこなう仕事であつた。例えば、一九五八（昭和三十三年）年に出版された井出英雅の著

作ではイレズミの施術について「昔は法度だつたから、閉めきつた薄暗い部屋で百知ろおそくの明かりを頼りに彫つた」と記されている^②。また、彫師の横須賀彫秀こと柿本秀男（一九二九年—二〇一七年）に二〇一五（平成二十七年）年に話を聞いたところ、戦前には「彫師がどこにいろのかわからなかつたので、彫師の仕事場には、彫っている友だちに連れて行ってもらふものだった」と語っていた。つまり、国内でもタトゥー専門誌が刊行されるようになり、ネット検索すればタトゥースタジオの位置と連絡先が瞬く間に判明するようになった二〇〇〇年代以前は「彫師は見つかりにくい」のが常識であつた。

彫師が見つかりにくい一方で、横浜という土地には彫師が集まつていた、との証言も筆者は九〇年代に得ている。以下は、浜松町在住の鳶職であつた清宮武三（一九一七年生まれ）から聞いた話である^③。清宮の父方の祖父は、牛留ぎゅうとめという彫師であつた。牛留は吉原の遊郭で女郎に隠し彫りや桜の花などを彫ることで「人の肌を突つつきやり方」を覚え、洋食のコック修行をした横浜でも、彫師としての腕を磨いた。そして、芝に戻つて表商売は洋食屋を営み、裏商売で彫師を続け、一九一四（大正三年）十一月十二日に四十二歳で亡くなつた。横浜は港町で彫師が集まつていたと、清宮は聞いていた。総合すると、この時代、外国人客にとっては「受け皿」、彫師にとつては「抜け道」が形成されていたことが強く示唆される。

本稿ではこうした視点から、外国人観光客と彫師、それを仲介する人々や場を歴史人類学的に分析する。すでに筆者は、歴史人類学の視点からいくつかの論文や原稿の一部で日本みやげとしてのイレズミについて言及してきた（山本二〇〇〇、二〇〇五、二〇一六 a、二〇一六 b、二〇一七、二〇二〇）。本稿では、日本の彫師と規制の概略を示したうえで、一八八一（明治十四）年に来日した英国二皇孫の施術希望に政府役人がどのように対応したのかについて検討する。そして、この二人の施術が、後に外国人旅行者たちが施術を受ける誘因となった可能性を指摘する。彫師の彫千代を例に、日本のイレズミがどのように評価され、どの程度の日数でいかに彫られていたのかを整理する。客の誘致がいかなる方法、媒体、広告でおこなわれ、どのような勧誘者が関わっていたのかを論じたい。

本論で用いる資料は、法的規制があつた時代のため、日本側の一次資料は少ない。しかし、外国人旅行者の旅行記や手記、事典などの各種記述、旅行案内書に掲載された広告は残されているので、本論は主にそれらに依拠している。また、伝聞も含まれているが内外の新聞や雑誌記事なども重要な手がかりとなる。

論文の構成を説明する。第二章「法的規制と英国二皇孫に斡旋された施術」では、一八八一（明治十四）年の英国二皇孫の施術を取り上げる。明治政府の高官が二人の施術希望にどのように対応したのかを辿る。さらに、二皇孫の施術がどのような影響を英国人に与

えたのが窺える資料として、一八九〇年よりチェンバレンによつて刊行された『日本事物誌』を示す。『日本事物誌』は日本小事典であり、英語圏の人々にとつて興味があり、日本の文化を理解する上で重要であると認識された項目が立てられていた。イレズミの歴史と文化、現状も独立した項目として解説され、二皇孫のイレズミ体験も紹介されている。第三章においては、一八九〇年代の横浜の彫千代と美術商との関わり、横浜港周辺に点在する関係各所の位置関係を確認していく。第四章では、彫千代だけでなく他の彫師たちがどのように旅客を勧誘したのかを、一八九三（明治二十六）年の横浜港とグラランド・ホテル周辺の呼び込みみる。第五章では東京・帝国ホテルの事例を紹介する。第六章は日本のイレズミや彫師への関心を背景に、死後も伝説化する「彫千代」について検討する。さらに、七章では日本みやげとしてのイレズミが、客たちや日本の彫師にとつてどのような意味をもち、彫師側はいかなる背景の人々が施術に関わっていたかを考察する。さらに日本のイレズミは世界的に形成されつつあつた「みやげとしてのイレズミ施術地」に組み込まれたことを論じた。結論では、それまでに展開した論点をまとめて示したい。なお、本論の引用文章については、読者への便宜を考え、漢字を現代のものに修正していることをあらかじめ断つておく。

二 法的規制と英国二皇孫に斡旋された施術

十九世紀なかばから、外交官、軍人、商人、お雇い外国人をはじめとして、さまざまな理由から来日し、短期長期にかかわらず滞在、居住する外国人が増加した。さらに、遊覧を目的とするグロープトロッターと呼ばれる一群の人々が現れた。旅行記や日本と英語圏で発行された新聞の記事、広告などを元にとすると、外国人訪問者による日本国内でのイレズミ施術が増加したのは、一八八五（明治十八）年から一八九四（明治二十七年）年にかけての十年間である。ブームとしては、長く見て一九〇六（明治三十九）年までである。筆者がブーム終焉期と仮定する一九〇六（明治三十九）年には、ヴィクトリア女王の孫息子にあたるアーサー・オブ・コンノート（Arthur of Connaught）がヴィクトリア女王の名代で来日した。この際、日光で初代彫字之が不動明王を彫ったと言われている（小山二〇一〇…二〇一頁―二〇八頁、玉林一九三六…二四四頁）。また、同年には英国人のウィリアム・ゴードランド（William Gowland、一八四二年―一九二二年）が神戸で下絵帳や道具を蒐集した¹⁴。一九〇六（明治三十九）年以降、客が日本で彫ったと自慢する新聞記事が英米圏の新聞で掲載されなくなる。施術が当たり前の風景となり話題性がなくなつたのか、客の熱が冷めたのか、あるいは日露戦争や黄禍論を背景とし

たアジア系への差別、第一次世界大戦による影響を受けたのかは不明である。

実際のところ、日本での施術流行期は、小山騰が指摘する英米を中心としたイレズミの流行期に重なる（小山二〇一〇）。そして、日本で再びイレズミが水面下で流行しだした時期とも重なっていた。小山の研究によると、一八七〇年代ごろから英国内でイレズミが流行しはじめ、一八八〇年代から上昇期に入り、一八九〇年代に最高潮に達した。そして、二十世紀初頭に下火になり、第一次世界大戦頃には収束した（小山二〇一〇…七六頁）。欧米全体のイレズミの流れもほぼこの時期に重なる。同時期は香港に日本人彫師が多数開業していた時代でもある（山本二〇一七）。

一方で、明治時代に入ると彫師の営業と客になることへの規制が強化される。男性のふんどし姿は欧米の基準では「裸体」となるため、新政府は外国人に対して不面目と考える行為を具体的に挙げながら条例で禁じた。港から規制が開始され、横浜などでは一八七二（明治五）年三月二十五日ごろに裸での通行や男女混浴が禁じられたと『横浜毎日新聞』が報じた。以降、横浜では路上での立ち小便のほか、イレズミが取り締まりを受けることになる。同年（明治五）十一月八日には東京府達として同様の内容を含む東京違式誣違条例を課した。さらに、現在の軽犯罪法に相当する一連の法律により、一九四八（昭和二十三）年まで彫師をすることと客になることが禁

じられた（宮川二〇二〇、山本二〇〇〇、二〇〇五）。

警察はイレズミを取り締まる一方で、それまでにイレズミを入れた人々に鑑札を出すことにした。一八七四（明治七）年九月二十四日の読売新聞記事によると、

此せつお調に成つた身体へ刺繡^{しじゆ}をして居るものは、一方面の四署へ出たのが（五月三十一日より七月二十日まで）二九八人中女が一人、一方面三署へ出た者が七十人余、亦六方面一署へ出たものが八百人余、千住の分署へ出たものが百六十人、内小塚原の娼妓が二人、此外にはまだ調べがよく知れませんが、女も大分ある様子（後略^⑤）。

とあり、相当数の人々にイレズミがあつた。

日本国内でのイレズミの禁止は、一八八六（明治十九）年四月から七月にかけて英国の新聞で報じられている。The Graphic、The Standardほかの新聞や雑誌で、「日本のイレズミが禁止された」との短報が続く。ただし、それ以前にも、外国にイレズミの施術禁止は知られていた。一八七八（明治十二）年に初の来日を果たしたイザベラ・バード（Isabella Lucy Bird、一八三一年—一九〇四年）は、車夫の装いを次のように述べた。

（前略）上に羽織っているもの「半纏^{はんてん}」はいつも身体の後ろでひらひらはためき、それで胸から背中にかけて入念に施された龍や魚の刺青^{いれずみ}が見えた。刺青は近年禁止になったのだが飾りとして好まれていただけでなく、破れやすい衣服の代わりにもなっているのである。（バード二〇一二第一巻：二一九頁—一二〇頁）

しかしながら、イレズミやふんどし姿での往来通行などの禁止は必ずしも守られなかった。日本近代史研究の田中裕二が指摘するように、「禪姿の取締まりの範囲は、東京や横浜といった地域の、さらに市内で外国人の目と警察官の目が届く範囲に限られたようである。一歩市内を離れると普段の開放的な姿に戻つた^⑥」のであつた。明治政府にとっては皮肉なことに、着衣で仕事する習慣が定着してきた時期から、日本での外国人向けイレズミ施術に関する資料が目立つようになる。

日本における外国人のイレズミ施術は、いつから始まったのであろうか。小山によれば、一八六九（明治二）年八月から九月にかけて軍艦ガラティアで来日したヴィクトリア女王の次男であるアルフレッド王子（後のエディンバラ公 Prince Alfred, Duke of Edinburgh、一八四四年—一九〇〇年）が日本でイレズミを入れたというが詳細は不明である（小山二〇一〇：一六三頁—一七四頁）。ロングフェローの

最初の訪日滞在と施術は一八七一（明治四年）である。しかしながら、この時点では本格的なイレズミの規制にまで至らず、明治政府が法的に規制した後に対応することになったのが、一八八一（明治十四）年十月の「英国二皇孫」の来日であった。この二皇孫とは、英国ヴィクトリア女王の孫にあたるジョージ五世（George V、一八六五年―一九三六年⁷）と早世した兄のアルバート・ヴィクター（Prince Albert Victor、一八六四年―一八九二年）であった。二皇孫は家庭教師のダルトン（John N. Dalton）とともに軍艦バツカントに三年間乗船し、西インド諸島や南アフリカ、オーストラリア、南アメリカ、地中海、エジプト、東アジア各地を巡って帰還した。この二皇孫の施術は、英国ばかりか欧米、日本の新聞などでも報道され、以降もたびたび言及された。これは、マスコミの発達に伴い、女王はじめロイヤルファミリーの一举手一投足が注目を集めるようになったためである。

両皇子の体験は、これまでも小山騰のほか歴史研究の高久嶺之介が考証を加えている（小山二〇一〇・一五二頁―二〇八頁、高久二〇一〇・一六六頁―一七一頁）。現時点では、皇孫接待事務方の最高責任者である長崎省吾（一八五〇年―一九三七年）の一九二七（昭和二年）年の回想「長崎省吾第一回談話速記⁸」が、日本政府高官と両皇孫との応答を伝えるほぼ唯一の国内資料である。

長崎の談話によると、日本政府は来日が決まるとダルトンを通じ

て皇孫たちに問い合わせをした。英国王室は海軍の航海実習中であるとして国賓待遇を遠慮したが、十月二十三日に横浜到着後、二皇孫は延遼館⁹に滞在した。二皇孫はダルトンを通じて長崎を呼び出し、イレズミを入れたいとの希望を申し出てきた。長崎は、日本ではイレズミを禁じている上に王位継承予定者でもあり、海軍の同期生たちが横浜でイレズミを入れたのを知つての出来心と考えた。自らの一存で許可するのをためらい、「日本デハ法律デ禁ジテゴザイマス」とだけ答えたという。

さらに、二、三日後にも長崎はダルトンより呼び出され、二皇孫の部屋に赴くと、「日本ノ法律デ禁ジテアルト云フデ返ヘス言葉ハナイカラ黙ツテ居ツタガ、昨日来タ同期生モヤツテ居ル、今日来タ者モヤツテ居ル、ドウカ箭青（筆者注：イレズミ）ノ途ハアルマイカ」と懇願された。そして、自分は海軍に籍を置き、いつ海底に沈むかもしれない。その場合、見分けられるのはイレズミひとつである。

「其ノ精神ノ為ニ箭青ヲスルノダカラ何トカ考ヘテクレ」と告げたので、長崎は少年たちの決意に大いに心を動かされた。さらに、ダルトンが現れて、もしできるならば世話をしてくれ、すでに皇太子と皇太子妃の許しは出ていますと口添えした。長崎が中野健明¹⁰に電報で「内々良イ箭青ヲスル者」を問い合わせ、やがて返信があつた。二皇孫が宮中で見かけた鶴の絵についてどのような鳥かと尋ねたので、長崎が「喜ビヲ象徴シタ鳥デゴザイマス」と答えた。そこで、

筭青をする者に鶴ができるか訊ねたところ、「訳ナクヤリマス」と答えたので、二皇孫とも鶴を彫ることになった。弟のジョージは鶴だけではなくもう一つ彫りたいと希望したので、頭文字の「G」も加えて右腕に彫った。長崎も施術に立ち会ったという¹¹⁾。長崎は二皇孫の挿話の締めくくりに、二皇孫とも明治天皇の意向を常に気にしており、非常に好感を持ったと述べている。長崎は二皇孫を横浜に送り届けて、十月三十一日に横浜から軍艦は京都に向けて発ったという。

日本側はイレズミを法的に禁じていることを説明したが、二皇孫は法律と明治天皇を尊重する姿勢を示しつつも、意思を通した。バツカント号の公式航海記にも、「彫師は取り縮まられているが、延遠館の居室まで通されてきた」と書かれており、二人をはじめとする乗組員の施術は日本の法律を犯していることを認識している。

さらに、施術は京都でもおこなわれた。『東京横浜毎日新聞』では、一八八一（明治十四）年十一月十八日に「英国皇孫両殿下は去一一日大坂へ到着 又た京都御滞在中文身師を旅館へ召さる」と報じている。小山は先に横浜で施術を受け、さらに京都で彫ったと結論付けている¹²⁾。この事情について最も信用できるのが、ジョージ五世本人の日記での「東京で腕に龍を、京都で別の腕に虎を彫った」という記述である¹³⁾。

さて、二人がイレズミを入れた影響は、日本社会にもすぐに現れ

た。一八八一（明治十四）年十二月二十七日付『東京日日新聞』によると、大阪で彫師を訪れる者が増えたという。

曩に英国両皇孫殿下の花繡せられし事を聞き及び、文明国の皇族さまがなさることだ、身体髪膚を毀傷せぬなど、近い国の唐人の寝言は聞には及ばぬ杯と、国に禁令のあるをかもまはず、大坂の下の勇み連は同府下西坂町の彫徳、宗右衛門町の彫市、難波新地の彫安、天満川崎の彫政など、いふ昔時名を得し花繡師の方へ押しかけ、仮令御法度でも開明の真似ならわらくはあるまいと、無法を云て頼みに来る者多しと、よしや文明国のする事なりとも、是らは真似ずもあれかし、事に法のゆるさざるものをや。

彫師や客の取り縮まりが続く一方で、日本社会で施術がひそかに続けられていたことは当時の新聞記事からも明らかである。一八九〇（明治二十三）年二月二十八日付『読売新聞』では、警視總監がイレズミの流行に歯止めをかけようとしていると報じた。次いで、一八九一（明治二十四）年十月三日の『読売新聞』では、「近來職人社会には一般に文身を為す事流行しこれを持つて業とする者島原のみにも五六名もあり時間を定めて諸方を巡回し或は戸を構へ外来者を待つ等中々注文者多き由」と報じている。一八九三（明治二十

六)年六月二十八日には京都で芸娼妓のあいだにイレズミが流行し、背中に俱利伽羅紋々、不動尊、鍾馗を彫る者がいると『読売新聞』が報じた。さらに、一八九九(明治三十二年)八月十日には、高松にて女子、それも女子学生まで流行が及び、両腕に入れて互いに誇っていると、『朝日新聞』が報じた。

一八八七(明治二十)年頃には、当時盛んに催されていた演説会のひとつで「文身の禁を解く」可否を論じる演説がなされた。解禁に向けて世論が盛り上がっていたかは定かではないが、会場ではその場で決が取られ、解禁に反対との結論であった。¹⁵⁾各地の現象が連動していたとは考えにくい¹⁶⁾が、一八七二(明治五)年の違式註違条例から二十年ほどを経て規制が緩んでいたことが窺える。

当時、英国の二皇孫を筆頭として、欧米の新聞では各皇室や貴族、富裕層、著名人のイレズミが注目を集めていた。¹⁷⁾オーストリアの皇位継承者予定者(皇太子に相当)であったフランツ・フェルディナント(Franz Ferdinand von Habsburg-Lothringen, 一八六三年—一九一四年)もその一人である。フランツはジョージ五世とニコライ二世の従兄弟である。一八九二(明治二十五)年に世界漫遊旅行に発ち、翌年の八月十六日に箱根宮ノ下の富士屋ホテルで龍のイレズミを四時間かけて入れたと日記に記している。

わたしたちはもうこの国のふつうの習俗はじゅうぶん満喫して

きた。そこでもうひとつ、わたしは入れ墨をしてみようと思つた。四時間もの間、溶液のついた針で五万二千回も刺されるという苦痛に耐え抜くと、ようやく左腕に竜の彫り物が燦然と浮かび上がった。戯れといえは戯れであろうが、もはや入れ墨は消せないのだから、おそらく将来は後悔することになるだろう。(フェルディナント著・安藤勉訳二〇〇五・一六〇頁—一六一頁)

長崎を舞台としたピエール・ロチの小説『お菊さん』(一八八七年)の出版、そして、一八九一年の露国皇太子ニコライの長崎での施術も、このイレズミブームを背景にしていたと解釈できる(山本二〇二六b)。¹⁸⁾二皇孫は初期の外国人向け施術であろうが、やがて治外法権を盾にイレズミ施術体験を楽しむ人々が増加する。

長く日本に滞在して研究をしたバジル・ホール・チェンバレン(Basil Hall Chamberlain, 一八五〇年—一九三五年)が執筆した『日本事物誌』(Things Japanese)に日本のイレズミ事情が一項目を立てて解説されている。日本小事典である『日本事物誌』は、後述する『日本旅行案内』と同時期に執筆され、一八九〇(明治二十三)年の初版から第六版まで刊行された。日本の社会・文化事典として、『日本旅行案内』(一八九九年、第五版)に同書の広告が掲載されている。

愛知大学の早川勇の研究によると『日本事物誌』は一八九〇(明

治二十三年に初版が刊行され、第二版（一九〇一年）、第三版（一九〇八年）、第四版（一九〇二年）、第五版（一九〇五年）、第六版（一九三九年）と版を重ねた。チェンバレンは版ごとに文章に細かく手を入れており、執筆項目は随時追加、削除、改訂された。例えば、初版が一四〇項目であるのに対して、第二版は一六三項目である。頁数は四〇八頁から五〇三頁に増えた。訂正第六版は、チェンバレンの死後出版された。「イレズミ」(Tattooing)は、第二版から項目に加えられ、最終版まで取り上げられている。¹⁸⁾¹⁹⁾²⁰⁾

最終版にあたる『日本事物誌』第六版²¹⁾では、日本のイレズミの歴史を簡単にまとめたうえで、イレズミの特徴を説明している。歴史については、明治時代に入ると官吏の中に野蛮な慣習と考えた者がいて、火葬と同じように即決で禁止されたと述べ、しかしながらヨーロッパ自体が助け舟を出して、グローブトロッターがイレズミを入れるようになったと解説する。ジョージ皇子は王にふさわしく腕に龍を入れたと紹介し、彫千代や彫安のような彫師はイレズミをまさに芸術の域まで高めていると述べている。エドシツク・モノポールとビールのように英国水夫の好むタトゥーとはまるで似つかない、素晴らしい線と美しさの鳥、花、風景が入れられる。主原料は墨と朱で、針は鋼製である。針は六種類の太さにわかれている、最も繊細な線には三本の針、普通の輪郭には四本から九本を束にして用い、ぼかしには五本、四本、三本と作った針束をさらにまとめ

て十二本にする。さらに六十本の針を用いることもある。針は絹糸で骨製の柄にくくりつけられ、ビリヤードのキューを持つように左手を支えとして右手で持たれる。針は組みつき部分より先を相当深く刺すが、腕前がよいので出血はめつたに出ない。また、コカインを皮膚にひと塗りするか、墨と混ぜていたと紹介している。

チェンバレンは、Howは彫師のニックネームで、彫るという動詞から来ており、monoはthingsであると注記した。彫千代の死後に出版された版では、注として「初代は一九〇〇年に情死したが、二代目は年若なのに立派に跡を継いでいる」と記されていた。²²⁾チェンバレンの『日本事物誌』の記述は具体的であり、知日外国人や美術収集家などが有していた当時の状況への平均的な認識に基づいて書かれていたと考えられる。

三 横浜の「彫千代」と美術商との提携、その広告

『日本事物誌』にも名が挙がっている彫師の彫千代は、日本みやげのイレズミに関する代表的な存在である。欧米人のイレズミ熱を敏感に察知した彫師の一人が、彫千代であったとも言える。一九三三（昭和八）年に横浜市から出版された『横浜市史稿 風俗篇』は、彫千代について次のように述べている。

馬丁を述べると、刺青のことを思出さずには居られない。而して刺青と云へば彫千代を思出させるのが横浜のもつ一裏面史である。(中略) 明治の初期、横浜に来て谷戸坂に住し、専ら外国人を相手に刺青業を営んで居た。(中略) 彼は殆ど外国人のみを得意先とし、嘗て来遊の外国貴族や紳士階級を刺青したことが少なくなかつた。殊に外国水兵は彼に刺青して貰ひ、夫れを見せびらかしてゐた(横浜市役所編一九三三・五七〇頁)。

彫千代は雅号で、本名は宮崎^{たかし}匡である。駿河(現在の静岡県)の士族出身で一八五九(安政六)年三月に生まれ、十九歳で在所から抜け出し、三十歳ごろに横浜に現れ、一八九二(明治二十五)年に渡辺フミと結婚した。谷戸坂に店舗兼自宅を構えて彫師をする一方、表商売として写真屋を営んだ。店舗では絵葉書や写真に加えて、イレズミの下絵なども販売したと考えられる。一九〇〇(明治三十三)年に満四十歳で鉄道の枕木の買い付けに北海道に赴き、同年三月に札幌の遊女と心中した。²³

彫千代が彫師となつた時期は定かではないが、彫千代本人が称したようにチャールズ・ロングフェローを彫つたのであれば、少なくとも一八八五(明治十八)年には遡ることができよう。ロングフェローは、「両親の裕福さと寛大さをあてにした「放蕩息子」であり、一八七一年(明治四)年から二年間にわたって日本に滞在した(ロン

グフェロー著・山田久美子訳二〇〇四)。Langfellow's Tattoos: Tourism, Collecting, and Japan (2004) を執筆した美術史家 Christine M. E. Guth によれば、この最初の日本滞在時に腕に巻きつく蛇を入れた。再び一八八五(明治十八)年に七カ月ほど日本に滞在した時には、背一面に鯉のイレズミを仕上げたという(図一)。彫師の名をロングフェローは手記に Horchio と記し、一日の手当ては七ドルだったと述べている(Guth 2004: 一四二頁、一五三頁ほか)。近年デジタル公開されたロングフェローの前正面の写真では、左わき腹下に「彫千代」のサインが見える。そのサインの上にはさらに何か文字が彫られているが判読できない。また、左上腕部に何を記念したかは不明であるが「十月五日」の文字が見える(図2)。

この施術については、アメリカの地方紙が短信だが、「有名な詩人の息子が横浜で三カ月以上かかってイレズミを入れた。普通なら三年から四年かかるころだ」と報じている。²⁴ その後も、米国の新聞では、英国二皇孫の施術とともにロングフェローのイレズミがたびたび言及された。Guth によれば、ロングフェローは、さらに一八九一(明治二十四)年の三度目の滞在でも胸に観音を入れ、芸者やトンボ、鳥ほかで腕を飾つた(Guth 2004: 一四二頁)。²⁷

Guth は、ロングフェローの二度目の来日時に親しく交わつたチャールズ・ゴダード・ウェルド(Charles Goddard Weld, 一八五七年—一九一一年)も横浜で Horchio の施術を受けた可能性が高いと指

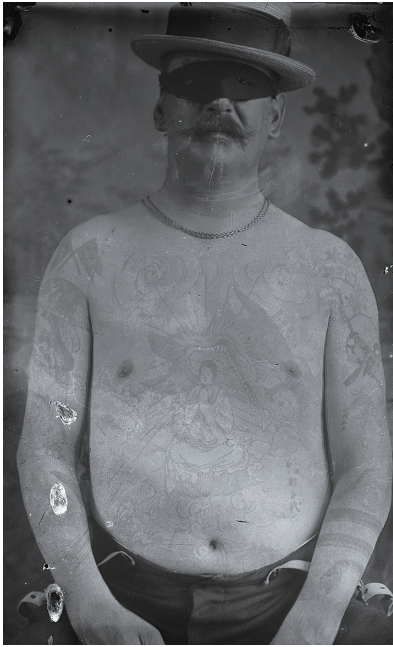


図2 Longfellowの正面
Charles Longfellow's Tattooed Front, c. 1885 (1008.002/002.002-#143), in the Charles Appleton Longfellow (1844-1893) Papers, 1842-1996, (LONG 27888), Longfellow House-Washington's Headquarters National Historic Site.

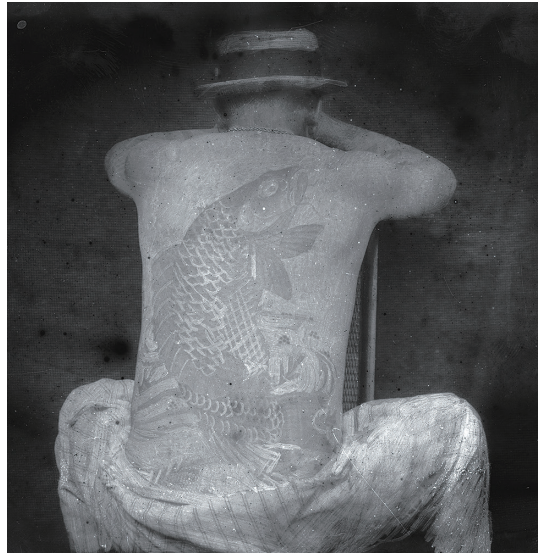


図1 Longfellowの背中
Charles Longfellow's Tattooed Back, c. 1884 (1008.002/002.002-#142), in the Charles Appleton Longfellow (1844-1893) Papers, 1842-1996, (LONG 27888), Longfellow House-Washington's Headquarters National Historic Site.

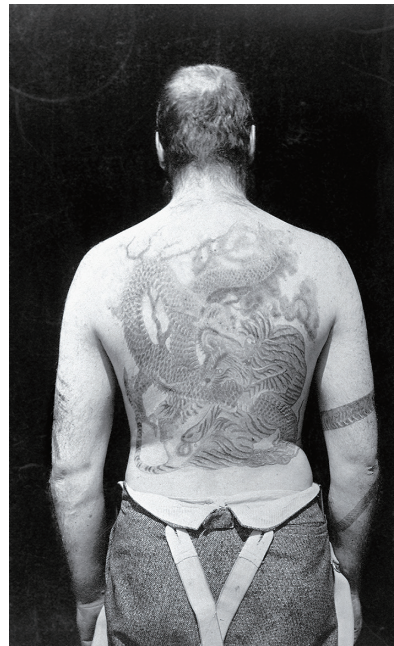


図3 Weldの背中
Dr. Charles Goddard Weld, Courtesy of the Peabody Essex Museum.

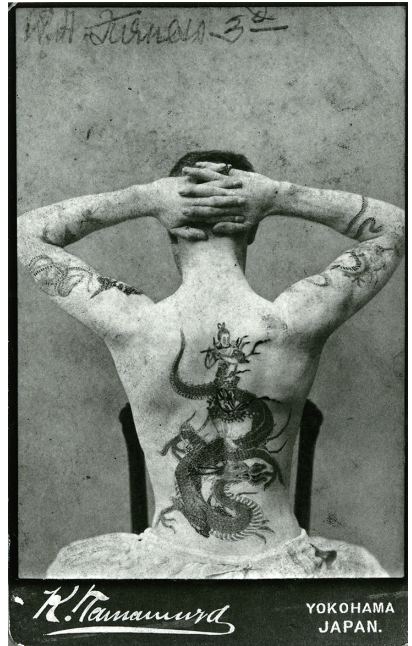


図4 Furnessの背中
 “Photograph by Kōzaburō Tamamura.
 Courtesy of the Penn Museum, image
 no. 139021.”

摘する。ウエルドは外科医で、後に一族の莫大な財産を管理しつつ美術コレクターとなった(中野二〇一八・八八頁)²⁸⁾。京都の彫安もロングフェローがウエルドに紹介したという。ウエルドの写真も残されており、背中全体に精緻なイレズミが仕上げられている(図3)²⁹⁾。

さらに、Guthによればロングフェローは、ペンシルベニア大学考古学人類学博物館(The Penn Museum)の民族学コレクションの核となるボルネオほかの収集品を寄贈したウィリアム・ヘンリー・フアーネス三世(William Henry Furness III)³⁰⁾にもHorichoを紹介したという。フアーネスの来日は、一八九五(明治二十八年)年、一八九六(明治二十九年)年、一九〇一(明治三十四)年である(図4)³¹⁾。写真は仕上がった直後に横浜の弁天通りにあつた玉村康三郎の写真場で撮影したものと考えられる(Guth 2004: 一五五頁—一五七頁)。

フアーネスは、「世界で最も芸術的なイレズミのある男」と当時の地方紙 *The Oregonian* (17 July 1894) で評されたという³²⁾。

横浜の彫師である参代目彫よしは、彫千代の下絵が精緻な描写に富むことから、機械彫りをした可能性を指摘する³³⁾。あるいは、最も細いビーズ針と呼ばれるタイプの針か、細い目処のない小町針で彫れば、これらの写真のようなイレズミは、手彫りでも三カ月程度で彫れなくはないとのことである。

いずれにせよ、ロングフェローとウエルド、フアーネスとも、背中や腹部全体に広がる「大作」であり、彫千代の客であつた可能性がある。ただし、彼らのイレズミは日本みやげとしては例外的である。Guthは彼らがなぜ日本の美術品の収集とともにイレズミに関心を傾けたのかを、embodiment(具現化)というキーワードで考察している(Guth 2004)。ここで本稿ではさらに、大半の外国人客の行動にも目を向きたい。客たちの多くは、大概数時間から一日程度で施術を済ませ、足早に次の目的地に向かつたからである。

国際定期航路が開かれ、横浜ほかから多くの外国人旅行者が訪れる時代に入ると、彫千代は旅行案内書やホテルの広告により集客を試みていく。個人客を相手にする一方で、英国系美術商のアーサー・アンド・ボンド・フライン・アートギャラリー(Arthur & Bond's fine art gallery、以下、アーサー・ボンド)と一八九三年前後の一時期、提携関係を結んでいた。この美術商が出した広告の一部では、彫千代のタ

トウールームが紹介されていた。アーサー・ボンドは一八八九（明治二十二年）年に横浜で設立されたのち、神戸とロンドンに支店をもった。社名はホーレス・フランス・アーサー（Horace Frank Arthur）が設立した会社にボンドが加わったことに由来し、一九二六（大正十五、昭和元）年まで事業が継続した。主軸は日本の美術品の輸出であったが、店頭でも美術品、骨董品を扱っていた（小山二〇一〇、菅二〇〇四）。美術史研究の菅靖子によれば、アーサー・ボンドに先行して、日本の美術製造品を扱う英国系美術商社がすでに数社営業を開始していた。日本資本でも、同種の美術商が開業していた（菅二〇〇四、山本真紗子二〇一〇）。ここからは筆者の推測となるが、美術商・骨董商に立ち寄る客たちがイレズミにも興味を示したことを踏まえれば、後発のアーサー・ボンドは彫師と組むことによつて、他と異なる事業を打ち出せたと考えられる。

実際のところ、一八八〇年代半ばには、外国において日本人の彫師たちが営業を開始している。例えば、芸能史研究の倉田喜弘は、一八八五（明治十八）年から一八八七（明治二十）年にかけて、軽業師や撃剣師の芸人、鋳^{かぎ}職人、履物職人、提灯屋などの職人ら約百人の日本人が英国に渡った経過を研究した。ロンドンのハイドパークに隣接するナイツブリッジのハンプリーズ・ホールに物産展か見本市の原型のような「日本村」（日本風俗博覧会）がつくられ、諸芸を見せた。しかし、火事に遭ったうえに観客に飽きられたこと

もあり、興行は十八カ月で終了した。会場では「幸い一行の中に上手な男があり、入墨屋をはじめました。蛇一つを彫りますと五円か六円、さらに技術を要するものは十円にもなったと申します」（倉田一九八三・七三頁―七四頁）という。倉田の著作には渡航者名簿が巻末に載せられているが、施術をした人物は不明である。³⁴

各種船舶の寄港地である香港においても、一八八三（明治十六）年には日本人彫師が来たことが英字新聞で紹介され、一八八九（明治二十二年）年には日本人彫師の営業が報じられた。香港の日本人彫師の記事は、英国各紙の新聞に一八八九（明治二十二年）四月から十二月にかけて散発的に転載されていた。記事では、この彫師が英国二皇孫の腕にイレズミをしたとも書かれていた（山本二〇一七）。³⁵

欧米全体でのイレズミの流行、そして手すさび程度でも日本の彫師がイレズミの施術をすれば欧米の客たちに受けることを、外国人相手の商売に目ざとい者なら知っていただろう。香港、英国、米国で働いた日本人彫師たちも、二皇孫や露国皇太子らのイレズミを自店の宣伝に使っている。後述するように、英国二皇孫の施術を自社広告に謳うほうが、外国人客の関心を引くと考えた可能性が高い。³⁶

彫千代の名は現時点で確認できる限り、一八八九（明治二十二年）年から外国の英字新聞に現れる。一八八九（明治二十二年）五月のロンドンの新聞、*Pall Mall Gazette* のインタビュに京都で答え、神戸に在住していると彫千代が述べた「The apelles of Japanese tattooer」

という記事が最初のものである。³⁷アーサー・ボンドと彫千代がいつ頃知り合ったかは不明だが、一八八九（明治二十二年）の記事をきっかけに両者が接近した可能性もある。また、アーサー・ボンド自身が彫千代を新聞社に売り込んだ可能性もある。ともかく、両者が提携することによって、外国人旅行者はアーサー・ボンドの神戸やロンドンにある各支社を通じて、問い合わせや予約が可能となった。おそらく、提携が解消された後でも、アーサー・ボンドは彫千代や他の彫師を紹介したであろう。

さらに、英国人の動物学者ガンビア・ボルトン（Gambier Bolton）が、一八九三（明治二十六年）かその翌年に彫千代を訪ねるなどとして、『ストランド・マガジン』に英日イレズミ事情の記事を書いた。小山によると、欧米圏の彫千代に関する記述は、ボルトンの記事に基づくものが多い（小山二〇一〇：二一八頁―二三三頁）。記事では、ヨーロッパからの女性客の多くが彫千代によって肩に小さな蝶やコウノトリを入れると述べている。³⁸この記事にあるニューヨークの富豪バンテルからの呼び寄せ話は、三年ほど後の一八九六（明治二十九年）十二月二十七日の『大阪毎日新聞』記事でも繰り返された。この記事では、彫千代は同年五月に警察に逮捕された際に、「自分（筆者補注…の仕事）は外国人向けであり内国人向けではない」と申し開きしたという。さらに、露国皇帝が前年にまだ皇太子であったときに、地方官吏の紹介で陛下の左腕に飛龍を彫ったとも語った。

警察は若干の罰金と営業停止を彫千代に申し渡したが、バンテルに一万二千ドルで三年間招聘されたと記事は続く。³⁹

提携時代の一八九二（明治二十三年）の広告は、一流ホテルにも出されていた。筆者が二〇一九（令和元）年に米国のオークションサイトから入手した資料に、一八九二（明治二十三年）四月の箱根富士屋ホテルの外国人向け晚餐メニューがある（図5）。このメニューの裏にアーサー・ボンドの広告がある（図6）。

客が持ち帰ることを期待して、美しいカードを作ったのであろう。メニューの裏にはアーサー・ボンド横浜店の広告があり、最後の数行に「TATTOOING」と題した宣伝文句がある。「彫千代…著名な彫師であり、アルバート皇子とジョージ皇子のご最厚を得た。世界中にそのすばらしく芸術性ある作品が知られている。私どもの専属であり、デザイン、見本帳を観ることが出来るタトゥールームがある」とうたっていた。

富士屋ホテルはフランツ・フェルディナントが施術を受けたホテルである。一八九三（明治二十四）年来日という時期からして、宿泊時にもこうしたメニュー兼チラシを配布していた可能性がある。

また、すでに小山も紹介しているが、当時の外国人旅行者が必ず携えていたといわれる旅行案内書にも、タトゥールームを含めたアーサー・ボンドの広告が掲載されていた。チェンバレンが一八九一（明治二十二年）に脱稿し、一八九三（明治二十四）年に刊行され

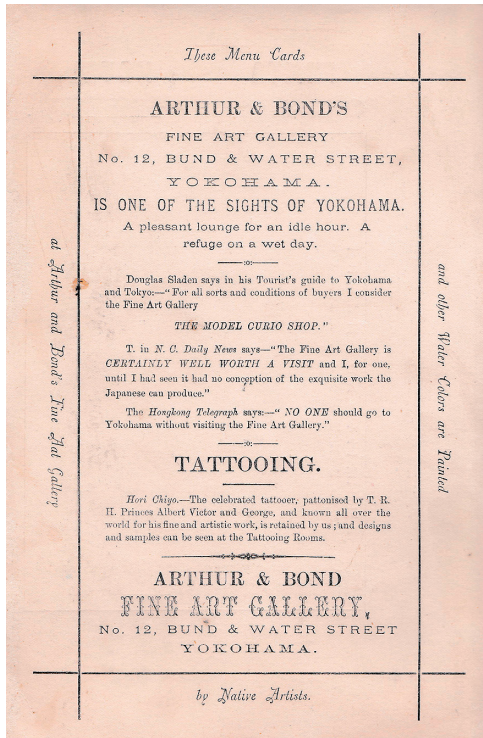


図6 富士屋ホテルメニュー裏の広告（筆者蔵）

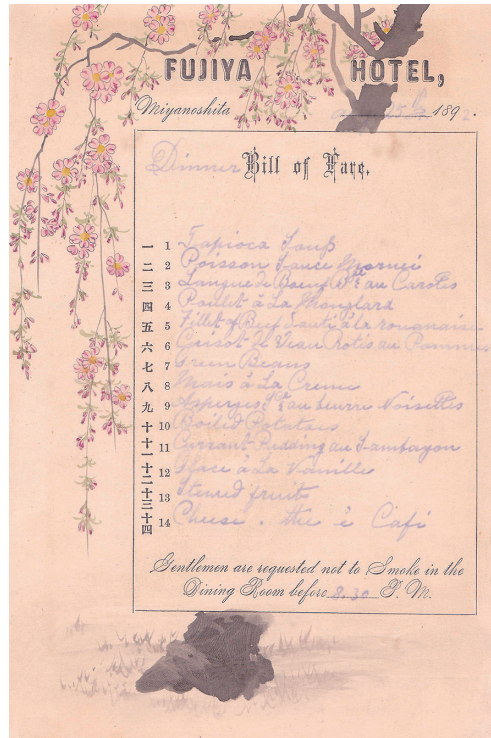


図5 富士屋ホテルメニュー（筆者蔵）

たジョン・マレー社 (John Murray Press) の『日本旅行案内』(A Handbook for Travellers in Japan)⁽³⁾の第三版にも富士屋ホテルと同じ広告が掲載されていた。

この広告の集客効果を量ることは難しいが、第三版の出版直後に次のような記事が *The New York Times* に掲載された。一八九三(明治二十四)年五月十四日付の新書紹介欄で『日本旅行案内』が紹介され、冒頭で TATTOOING に関する広告文を全文引用してある。そのあと、文章は「本書は実用的なガイドブックで、日本旅行に行く際にはチップにあたる茶代などに迷うが、きちんと費用面を含めて紹介してある」と続く。広告は関心のある人々の目を引くことにある程度は成功したと思われる。

それでは、横浜港とアーサー・ボンズの店舗、彫千代の仕事場の位置関係の確認をしておきたい。アーサー・ボンズの店舗住所は、Water street No. 12 (水町通り、山下町十二番) である。山下町は山手町とともに外国人居留地にあたる(図7)。

山下町十二番付近は、ホテル客に骨董品や美術品を売る美術商や銀行が所在していた。地図によると、当時は「フランス(仏蘭西)波止場」と呼ばれた小さな外国人専用の波止場と直結する位置関係である。客を呼び込むには、極めてよい立地である。その後、アーサー・ボンズの店舗は、最初の店舗の水町通りを挟んだ向かいの山下町三十三番に移ったが、広告では横浜グラランド・ホテルの向かい

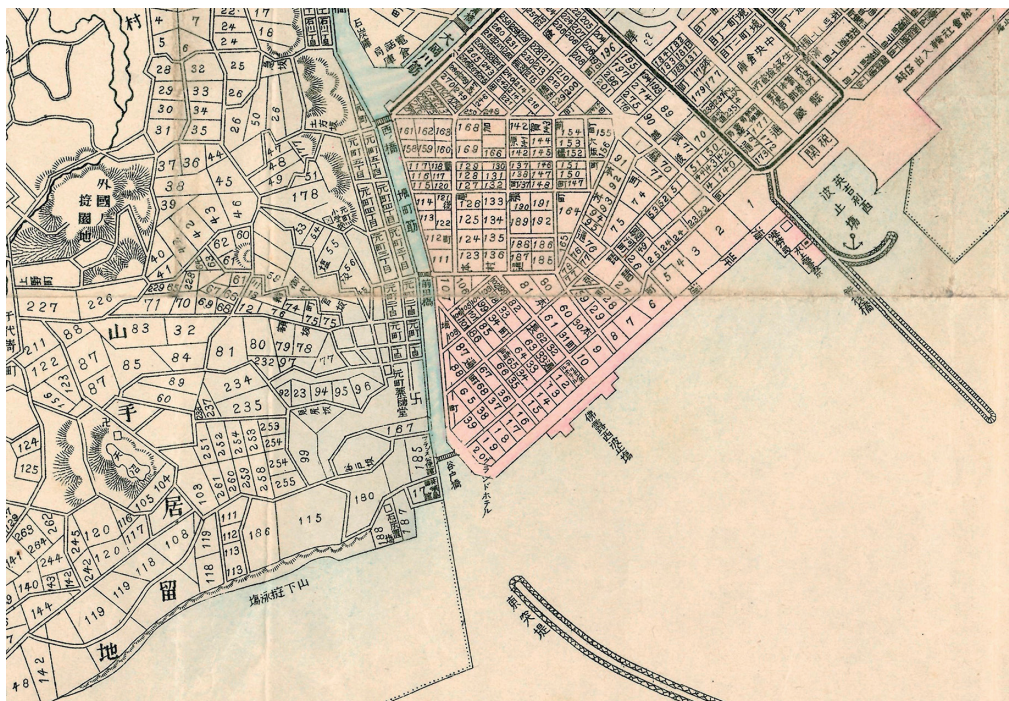


図7 谷戸坂、山下町、フランス波止場の地図（1908年、横浜都市発展記念館所蔵「市区改正横浜実測図」より一部を拡大）

と表現されている。店舗としては、外国人向けのホテル、店舗が立ち並ぶ一等地にあった。

横浜には、一八六〇（安政七、万延元）年には横浜ホテルが開業し、それから十年間に小規模なホテルが四十軒ほど誕生した。一八七三（明治六）年に開業したグラランド・ホテルは、海岸通りの端の二十番である。名実ともに当時の横浜で最高級のホテルであり、建物は木造二階建てで、一階に食堂や厨房、読書室、二階には三十ほどの客室があった。後に新館も建設された。

アーサー・ボンドや谷戸坂は、港とホテル街からしても徒歩圏にあり、谷戸坂は、グラランド・ホテルやアーサー・ボンドからすると、東側にあたる。関東大震災前は、谷戸橋通りとも呼ばれる水町通りを山下町側から抜け、木造の谷戸橋を渡っていくと谷戸坂につながり、坂をのぼれば山手居留地が広がる山手の丘（現：港が見える丘公園）に達した。港からほど近いこともあり、谷戸坂には外国人客目当ての店が立ち並ぶようになった。

谷戸坂の住居兼仕事場は、広告で示されたところの「タトゥールーム」であった可能性もある。理由は不祥だが、彫千代とアーサー・ボンドとのビジネス面での結びつきは、数年で解消されたようである。筆者の把握した限り、一八九四（明治二十七）年以降のアーサー・ボンドの広告には、彫千代やタトゥールームの存在は謳われなくなる^①。これは、イギリスが法的に規制されていることを理



図8 有島生馬が復元した彫千代の店舗看板（筆者作成）

由に、広告が規制された可能性も考えられる。

谷戸坂には二つの坂道があり、「表坂」とも呼ばれる馬車や人力車で入れることが可能な谷戸坂の幅広い道は、当時のメインストリートの一つである。もう一つは山手居留地に向かう道として、途中から階段となる「裏坂」があり、裏坂沿いには日本人の住家が続く。この裏坂に、彫千代の仕事場兼店舗があった。死後二十年前後に取材をした作家で画家の有島生馬（一八八二年—一九七四年）は、小説「彫千代」で実際の店舗写真にある看板を解説して小説中に示している（有島一九二四）。この看板に

あるように、彫千代は表の商売として写真屋をし、土産用の絵葉書を買っていったという（図8）。

一八九五（明治二十八）年八月二十三日付の *The San Francisco call* の掲載記事、Robert H. Davis がスケッチと記事を担当した *"Toro chio, The tattooer"* ⁽¹³⁾ には、彫千代の下絵と酷似するイレズミが紹介されている。サンフランシスコの男性の下腕写真スケッチに起こしたもので、右腕には組み合わせたイニシャルと蝶、左腕には鶏が彫られている（図9、図10）。

記事の内容は、Sands Forman なる人物がその年の五月に彫千代のもとに数日滞在して聞いた話をまとめている。記事によれば、彫千代は英国の両皇孫と有名な詩人の息子を彫ったことがあり、年に八千ドルを稼ぐ。横浜グラランド・ホテルのビリヤード室で長時間過ごしているの、予約はカードを送り、彼が戻ってくるのを待たねばならない。仕事部屋にはたくさんさんの道具があり、通常、下絵を書いてから彫り上げるまで半時間だという。数日で痛みが取れ、腫れが引き、あとは一生ものとなる。非常に多くの女性も腕や肩に可愛らしい図柄を入れている。「彼は紳士で、学者であり、芸術家である」と手放しの褒めようである。ただし、この記事自体も、アーサー・ポンドが彫千代による宣伝の可能性もあることも指摘しておく。

四 一八九三（明治二十六）年の横浜港とグラランド・ホテル周辺の活況

一八九三年頃には、外国人客相手の彫師の売り込みは堂々とおこなわれていた。横浜グラランド・ホテルとその周辺に泊まる外国人旅客への売り込みは、イレズミにとどまらずさまざまな物品、サービスにまで至り、活況を呈していた。一八九三年の横浜港付近の賑わいについてヨセフ・コジエンスキー（Josef Kozensky、一八四七年—一九三八年）の旅行記を参考にしたい。後にチェコの教育総監となる



図10 Horo Chio記事に添えられたスケッチ(左腕)



図9 Horo Chio記事に添えられたスケッチ(右腕)

コジエンスキーは、一八九三年九月二十九日から五週間、日本に滞在した。一八九五(明治二十八)年に出版した旅行記 *Zapiski* では、日本人、清国人の物売りが横浜・グランド・ホテルの部屋まで殺到する様子を生き生きと伝える。コジエンスキー自身はイレズミを入れなかつたが、港やホテル周辺が非常に活況を呈していたと書き残している。

外国人の客がその部屋に落ちつくや否や、シナ人の洋服屋や靴屋が用はないかとやつてきたり、または行商人が日本の骨董品はどうかと勧めにくる。彼らのあとからホリ(彫師)と呼ばれる日本の芸術家が部屋に来て、お客の皮膚や体のどの部分にでも痛みなしに入れ墨することのできる絵柄の見本を見せてくれる——それには、ふくろう、虎、竜、鷹、亀、狩りや戦争の場面などがある。

この芸術家は父親からその腕前を継いだものであるが、彼は外国人だけしか入れ墨することが許されていない。一八六八年に日本政府は、体を入れ墨で飾ることは野蛮であるとして、これを禁止した。日本の老人はたくさん入れ墨で皮膚を飾ることを好んだ。特に支配者は、半裸の格好でお供する従者や馬丁ができるだけ人目を引くような入れ墨をしていることを自慢した。

しかしながら西からの世界観光旅行者は、日本人自身が法律によつて断念したものを受け入れている。外国人で入れ墨をしないで日本を去る者はきわめて少ない。イギリスの皇太子も入れ墨をして、模範を示すこととなつた。汽船チャイナ号のヨーロッパからの乗客仲間もまた、横浜のグラランド・ホテルでこの珍しい機会を逃さず、永久に日本の芸術家の記録を体に留めるのである。入れ墨は一人が約二円である。¹⁵⁾

たくさんのちらし広告やパンフレット類が部屋のなかのテーブルの上においてある。これらは手芸品店（筆者注：工芸品店）の広告である。世界的に有名な陶磁器とか、七宝焼などのエナメル細工品を制作している店が、美しいちらしにその製品を紹介している。（コジェンスキー著・鈴木文彦訳 一九八五・四頁―六頁より）

コジェンスキーはまた、ホテルや写真館が無料の案内書を用意していたことにも触れている。美しい案内チラシや、各種宣伝ツールがロビーや部屋などに置かれている様は、すでに現在のホテルと変わらない。

一九二七（昭和二）年九月十一日号の『サンデー毎日』に「入れ墨の女」という題で掲載された明治から昭和時代にかけて活躍した新聞記者の赤川菊村の談話では、高村光雲はか当時の著名人から聞

いた話として、

横浜には彫千代といふ名人がある。外国船が入港すると忍びやかにホテルへ現れて来る。一寸四方いくらといふ報酬らしい。俱梨伽羅紋々になると日本人ならば六十円乃至八十円。外国人になると一寸したものでも二百円位は取る。

と述べている。¹⁶⁾

彫千代をはじめとする横浜の彫師については、もう一つ証言がある。一九三六（昭和十二）年五月十一日に、往時を知る横浜の古老たちを朝日新聞社記者が囲んで座談会をおこなつた。

記者 その頃、黒船の西洋人の船員は、さかんに日本の刺青をしたといふことですが

鈴木老 異人の船を覗くと、やつてゐた。刺青師は日本人だつた
記者 谷戸橋の彫千代といふ人を知つてゐますか

鈴木老 名は知らないが、外国の船が入つて来ると、ちよいとくやつて来たね

記者 刺青絵は日本のですか

戸部老 主に鷹を彫りましたね。手の甲とか、胸へ彫る、外国人は大抵手の甲とか胸が主です。大抵鷹が多いでせう

鈴木老 桜の花もよく彫りましたよ。それから情婦の名を彫つた。どこの国でも「色ごと」の人情は同じさね

近代日本商船・港湾の研究者、志澤政勝によれば、船が沖どまりが多かった時代には、入港すると船具・食料品納入業者、荷役作業員、旅館の番頭、洗濯屋、物売りほか、船員も対象としたさまざまな職業の人々が船に現れたという。こうした港の活況の中で、彫師も売り込みをおこなったのである。

次章では東京での施術について、広告と彫師側の証言から述べていく。

五 東京の帝国ホテルと彫師

当時、港に降り立った外国人は、宿泊や滞在は安全で言葉が通じ、欧米の流儀で済ませられる横浜で主に済ませ、東京へは日帰り立ち寄りしていた。交通網と情報が充実するにつれて、効率よく名所めぐりをして時間の短縮をはかる短期旅行者が増加する（長坂二〇一〇）。一八九一（明治二十四）年頃には、彫師も客も、施術のために横浜と東京を行き来していた。品川―横浜間には一八七二（明治五）年に日本初の鉄道が開通しており、運賃は高価ながら、片道三五分程度でつないでいた（宗像編二〇〇〇…五九頁）。

例えば、一八九三（明治二十六）年に出版されたニューヨークに在住した米国人フレドリック・トンプソン（Frederick Dioudai Thompson, 一八五〇年―一九〇六年）の『早回り世界一周旅行記』（別の邦題は『太陽の通路』。In the track of the sun: Readings from the diary of a globe trotter.）では、一八九一（明治二十四）年一月十一日の月曜日に、東京から施術のために赴き、横浜グランド・ホテルには一時間以内で着いたという。施術に当日の昼二時から深夜一時までかかり、合間に一時間の夕食をはさみながら、彫千代の仕事場で腕に龍を入れた。大変に痛く血が出たが、結果に満足したという。トンプソンの著書には、彫千代が店で販売していたか、記念に渡していたと考えられる三十歳頃の彫千代の肖像写真が掲載されていた（図11）。名はF. M. Hari chyoとなっている⁽⁵¹⁾。長崎大学附属図書館にも同一の写真が所蔵・ウェブ公開されている⁽⁵²⁾。

一八九四（明治二十七）年刊のA Handbook for Travellers in Japan. 第四版には、「HORI TOME PROFESSIONAL TATTOOER EMPERIAL HOTEL, Tokyo. To face page p. 12 Advertisement」と書かれた横十センチ、縦三センチほどの広告が掲載されていた。この広告は、帝国ホテル（一八九〇年開業）と伊香保温泉の金太夫ホテル（現在、二十代目を数える蓬萊館木暮総本家金太夫旅館）の広告ページに挟み込まれており、目立つようになっていた。

彫留の人物像は、不明である。一九二〇年代から三〇年代にかけ



図 11 彫千代の肖像写真
(長崎大学附属図書館所蔵、幕末・明治期日本古写真データベースより <http://oldphoto.lib.nagasaki-u.ac.jp/jp/>)

て日本の彫師を取材した玉林晴朗によれば、彫留は深川にいたポテ売りの魚屋で、後に彫師となった。この彫留は大柄な男で大酒飲みであったという(玉林一九三六・二二九頁)。この人物像からは、広告を自力で出せるようには思えず、誰か助言した人物がいた可能性がある。あるいは、彫留を名乗る彫師が別にいた可能性もある。

さらに、玉林は、名人の誉れが高い初代彫宇之(二八四二年?—一九二七年⁵³)が帝国ホテルでの施術をしたとも述べている。彫宇之が各国の大使館や公使館に雇われている日本人の別当を彫ったところ、その別当から大公使館にいる日本人のコックやその他の人々を彫り、次第に外国人に知られるようになった。それらの外国人はイ

レズミに興味を覚えて、彫宇之から写真を得て喜んでいた。そのうちに、外国人の客が現れ、その人々に彫るとさらに外国人仲間になり、各所から頼まれるようになった。在住外国人、さらには外国から来てホテルなどに滞在している外国人まで彫宇之に頼んだ。次第に帝国ホテルをはじめ横浜のホテルなどへ度々出入りするの、そのホテルのボーイとも親しくなり、その人たちが彫宇之の紹介に努めた。帝国ホテル等もすでにインド人の彫師が出入りしていて、外国人の求めに応じていたが、彫宇之が仕事をするようにになってから、そのインド人はいなくなったという。また横浜もその頃、彫千代のほかに彫勇という彫師がいたが、やはり彫宇之に押されてしまった。これらの外国人の名刺や礼状が彫宇之の自宅には束にするほどあったが、没後に子孫が興味をもっていなかったので処分してしまったそうである(玉林一九三六・二四二頁—二四三頁)。

彫宇之の談話からは、別当、ボーイなども施術の勧誘や彫師の紹介につとめていたことがわかる。横浜には、彫勇と雅号を名乗る彫師がいたことやインド人彫師なども施術をおこなっていたことも窺える。

また、一八九六(明治二十九)年に刊行された日光の観光案内書である Robert Charles Hope という人物の著書 *Do not say Magnificent before you see Nikko.* (日本語題名「日光を見ぬまへけつこうと云な」)に、京都の彫安こと Nakashima の広告が掲載されている。この広告の対

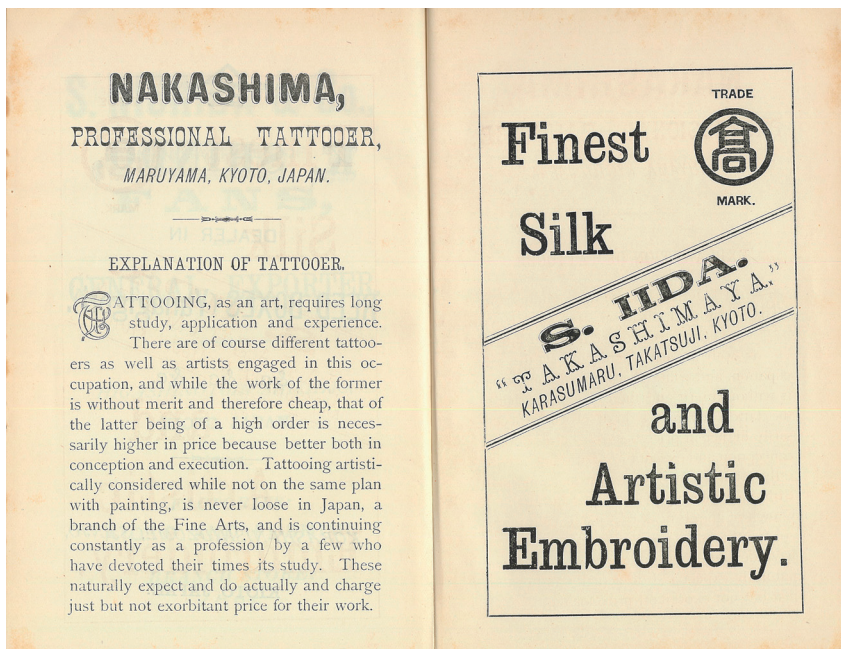


図 12 Robert Charles Hope による *Do not say Magnificent before you see Nikko.* (日本語タイトル“日光を見ぬまへけつこうと云な”1896年)に掲載された彫師 Nakashima (中島) の広告。(国際日本文化研究センター図書館所蔵本)

面頁には高島屋の広告がある(図12)。

A Japanese Tattooer. という一八九一(明治二十四)年に英国の新聞に掲載された記事は、彫師、客ともに不詳であるが、施術の雰囲気を知ることができる。

(前略) 日本の永久なる記念品を欲しがっている観光客や変わり者がいる限り、この職業(訳者注・彫師)は完全に消えることはないだろう。観光客たちは、蛇や骸骨または女の子の名前を自分の皮膚にイレズミする以上に優れた記念品になるものはないと思っっているはずだ。このような依頼を受け入れる彫師の一人や二人、どの港でもいる。一般的に、かなり増えている。東京在住の「画家」によつて、この記事の筆者もイレズミしたことがあつた。この紳士は東京から神戸まで仕事のためにやってきた。彼の到来は、地方紙に報じられた。この人物は日本の彫師の中でもトップクラスの腕を持つており、外国人向けホテルに宿泊した。私たちは約束をした晩、約束の時間にきつかりに小ざつぱりとした身なりの背の低い男がボーイに案内されて来た。片手には包みを持ち、片手には山高帽をもつていた。グレーのツイードに、足袋と草履ではなく文明的なブーツを履いていた。このことからわかるように、彼は日本人らしくない出で立ちで、外国かぶれであつた。日本人特有の礼儀正しさも、

彼は早々にふりきってしまったようだ。挨拶をしたときのお辞儀もなぜか今までの日本人の礼儀正しさとは少し違う雰囲気を感じた。

彼が持っていた包みには、デザインがふんだんに描かれた見本帳とイレズミ用の道具が入っていた。見本帳を開けば客の身体へ写し取るよう用意した数多くの色鮮やかな図案や場面のデザインが飛び出てくる。そのすべてに番号と価格がつけられていた。私は三味線をつま弾く骸骨を右前腕に、左前腕には腕に突き刺さり血が流れる短剣を彫った。骸骨は二・五ドル（およそ九シリング）、短剣は二ドルしかかからなかった。まず、彼は私の太い腕をむき出しにし、剃刀で施術する箇所を毛を剃った。そして、ラクダの毛が使われている筆と墨汁を使用して、デザインの入る輪郭を慎重に描いた。彼は乾くまで待ち、その後イレズミを入れる作業に移った。持ってきた針の中で小さな木の柄にくくりつけた一番小さい針の束を選んだ。針の束はすでに二本からおそらく一二本用意されていた。筆で狙った箇所に墨をのせた後、彼はスケッチした輪郭を針で刺し始めた。痛みは全く無かったが、針に刺されるたびに血が出てきた。こうして作業は少しずつ進み、左手の親指にそえた針で転写した絵が完成するまで彫っていく。必要に応じて、細部を彫るためにより大きな針束を使い、ぼかしのため最も大きい針を使った。出来上

がったものは特に芸術的に見えなかった。私の腕はかなり腫れていて、骸骨のすべての関節から血がにじみ出ている——だがどんな施術でも、骸骨は通常そうなるだろう。しかし、私はあまり心配していない、一週間か二週間も経てばきつと腫れもひいてイレズミは素晴らしく見えるはずだと確信していた。実際そうだった。後ほど、彫師のサインを骸骨の脇に添えてもらったが、彼はとりかかったものの、おざなりな態度であった。この作業は契約外のためか、彼は丁寧ではなくあまり神経を使わずに終わらせた。短剣の仕上がりもほぼ同様であったが、短剣にかなり赤色が使われていたのが異なっていた。思い出しても、血は吹き出ているさまは非常に生々しく見えた。入れた当時からすればイレズミの鮮やかさは失われてきた。（後略⁵⁴）

この無署名記事によると、東京から神戸に彫師がわざわざ来て施術したとある。また、服装からしても、外国人向けの彫師はかなり「西洋かぶれ」でもあることがわかる。

六 灰燼に帰した横浜、伝説化する彫千代

一八九九（明治三十二年）七月一日、条約改正の結果として日本全国で貿易が可能となり、外国人は全国いずれの場所でも居住と貿

易業務が可能となった。「内地雑居」と言われ、この日から外国人居留地が日本の市区に編入、地方組織の一部となり、横浜外国人居留地（山下町と山手町）は横浜市に編入された。外国人の「治外法権」も、すでに一八九四（明治二十七年）年に英国との間で撤廃され、次いで十五カ国間でも撤廃となった。一九〇〇（明治三十三年）年のはじめに彫千代も、新しい商売に手を伸ばした。しかし、米国の企業から委託を受けた鉄道枕木の買い付けに失敗して同年七月に札幌で自殺する。横浜も一九二三（大正十二年）九月の関東大震災で灰燼に帰す。谷戸坂に栄えていた商店もすべてがれきと化した。

しかしながら、「彫千代」の影響力は、外国で仕事する日本人彫師たちにとつては大きく、死亡後も名を拝借する彫師は後を絶たなかった。彫千代の名は客ですら、Hori Chio、Hari Chio、Horo Chioなどと綴ったが、類似した名前や弟子を名乗る者は当時の英米圏新聞に頻出する。⁽⁵⁵⁾ 彫千代と名乗った者もいて、横浜の文身歴史資料館には、年代は不明であるが、神戸から香港の Queen's Road East（灣仔）に来た彫師で、日本の美術商も名乗る Hori Chio の英文名刺が残されていた。

彫千代が一九〇〇（明治三十三年）年七月に死亡した直後、同年八月十三日には、ロンドンの *The Morning Post* 紙に、元は横浜にいた Hori Cho が彫師 Walter Satow の仕事場にいる、との広告が出された。おそらく時期からして、一八九九（明治三十二年）年五月九日に

Hampshire Telegraph and Sussex Chronicle 紙のインタビューを受けた Hori Cho と同一人物であろう。⁽⁵⁶⁾ 彼はあまり英語が話せなかったが、香港、上海、サンフランシスコ、アフリカ、インドほかをまわり、最後にマルタ、そして二年前にロンドンに來たと自称した。米国では *The New York Times* の一九〇一（明治三十四年）七月二十一日付の記事では、米国にいる三橋（Mitsubashi）に関する記事“*The Gentle Art of Tattooing*.”が掲載された。記事によれば、三橋は Hori Chio の親戚で、弟子とも称している。京都の彫安も、一八九八（明治三十一年）年の英国の新聞記事では彫千代公認の弟子を名乗っていた。⁽⁵⁷⁾

一八九〇年代から一九〇〇年代前半にかけて、英米の新聞に名が現れる彫豊（Horitoyo）は、「日本の偉大な彫師である Toyos の弟子」と名乗っていた時期もあったが、一八九八（明治三十一年）二月初旬の米国の新聞記者のインタビューに、ロシア皇帝を彫った横浜の彫千代（Hori chyo）の弟子であると自称した。⁽⁵⁸⁾ 一八九八（明治三十一年）一月一日に、*New York Herald* 紙の四頁半面にインタビュー記事“*He tattooed Royalty: Yoshiuke Horitoya in New York.*”が掲載された。この記事を『報知新聞』同年二月十日付紙面が「紐育の彫豊（王侯貴人淑女の文身）」と題して短く紹介した。記事中では「日本でこそ文身は禁制なれ欧州にては非常に珍重され王侯貴人淑女の間に持離（はら）さること夥し現に有名なる彫千代の高弟にて露国皇太子殿下に技術を施せし彫豊芳助なるもの紐育に渡航せるが紐育ヘラルドは其

実像談話を掲載せり」とあった。彫千代は、弟子を自称する彫豊に驚いただろうが、記事にどのように反応したのかについては不明である。

国内でも彫千代についての伝説があり、昭和初期にイレズミについて調べていた谷井基次郎が書き留めている。

（文身道具は）外国のはズウツト優雅に出来、象牙をはめたり、又は金銀をちりばめたりしている。これを今は故人となったが、万朝報の横浜支局長曾我部一紅氏が、これを蒐集していたように記憶している。人の話によれば横浜にいた彫千代などはこの象牙や金銀のつけてある道具を持っていたとの事である。外人を相手にしている人は勢ひこう云うものが必要となるのである（谷井一九二八C・二三頁）。

一九三三（昭和八）年に米国人のアルバート・パリ（Albert Parry）は *Tattoo, Secrets of a Strange Art as Practised by the Natives of the United States* を刊行している。本書は英米圏で二十世紀初頭までのタトゥー事情を述べる際によく参照される本であり、版を重ねている。彫千代、彫豊についても触れており、彫千代については *New York World* の一八九七（明治三十）年八月二十七日の記事での形容を引きながら「イレズミ界のシェークスピア」と紹介した。³⁵⁾「イレ

ズミ界のシェークスピア」は、現在も彫千代を語る際に引用され、下絵などの検討なしに独り歩きしている感もある。

自らの箔づけに彫千代の名を借りたのは、英国の著名な彫師で King of Tattooist の通り名のあるジョージ・バーチエット (George Burchett, 一八七二年—一九五三年) も同様である。海軍兵であった十代のころに白髭の上品な老人である彫千代からトカゲのイレズミを彫ってもらったと、伝記 *Memoirs of a Tattooist* で述べている。³⁶⁾

これまでの記述からすると、現在まで引き継がれている日本のイレズミへの高い評価や関心は、欧米においては本論で取り上げた時期に確立したと考えられる。彫千代、彫安、彫留、彫宇之、彫豊、彫勇、野間、三橋の背後には、無数の彫師たちがさらに無数の客たちのイレズミ熱に応じていたことも見落としてはならない。

七 考察——日本みやげとしてのイレズミ

日本だけでなく、世界各地にはさまざまなイレズミ文化がある。欧米で十九世紀に入り発達してきた新聞、雑誌などの大衆メディアでは、植民地を中心に各地のイレズミ習慣が盛んに紹介されていく。日本も開国後にイレズミが紹介されるようになり、高い注目を集めていく。日本のイレズミが常に注目を集め、技術的にも評価されたのは、次のような理由が指摘できる。

一つには、日本の習慣では、全身にわたって具象的なイレズミが入れられたことである。また、欧米でよくあるように身体に十センチ四方ぐらいの図柄を記念として複数入れるような習慣はなく、むしろそれは避けられていた。身体全体に一枚絵をうまく配置することが求められ、その下絵として好まれたのは浮世絵であったことが挙げられる。

日本の彫師がいつからどのような経過をたどって職業として確立してきたのかは具体的には不明であるが、少なくとも欧米に一世紀は先んじる形で、日本において彫師は技術職、専門職として確立していた⁽⁶¹⁾。町場の職人であったイレズミの彫師は、美術的にはより高度な技術を要するものとして評価されている花鳥風月を描く日本画の表現ではなく、主要客である職人男性にとつて身近な英雄や妖怪などの浮世絵を下絵として彫っていた。また、十九世紀後半においても欧米の施術水準は下絵などを確認する限り、日本と比べて稚拙な面があり、歌川国芳による有名な続き物「通俗水滸伝豪傑百八人之一個」をはじめとする武者絵を下絵とすることなどは、欧米の当時の技術水準にあつては望むべくもない状況であつた。日本の彫師はボカシ彫りなどを駆使する技術もあり、下絵と技術は最高と考えられていた。こうした背景が、「日本で真正なイレズミ」を彫りたいと渴望する一群の人々を生み出すことになつたと考えられる。国際航路が開かれ、定期的に旅客船が行きかう時代に入つても日本は

遠く、旅費がかつたこともあり、客にとつては日本みやげのイレズミをひけらかす効果は十分にあつたであろう。

もう一つの重要な点は、欧米のイレズミブームは、ジャポニズムの時期とも重なつていたことである。すでに先行して欧米に浮世絵の構図やモチーフが親しまれており、世界各地のイレズミ文化に興味があつた人でも、幾何学的な表現が多い先住民族のイレズミよりも、実際に彫る際には具象的で理解できるものを彫つた、と考えられる。図柄についての検討は別稿で改めて論じることとするが、客たちはエキゾチックでもあり、日常的な意匠として親しみをもち始めていた日本的なモチーフ、そうでなければ、すでに欧米世界でなまされてきた図柄を高い技術で彫ることをみやげとして選んだと考えられる。

欧米においては、軍人や芸人、職人集団などの一部にイレズミをする習慣が長らく続いていた。さらに、大航海時代以降は、船員や海兵が世界各地の寄港地でイレズミを入れるようになっていく。その行動は多数の寄港地を経たことを身体のイレズミで示すものであり (Salway 1896)、いわば記憶と経験の再現装置としてイレズミを使うことに相違なかつた。やがて、欧米でも各港で彫師となる人々が現れるようになったのが十九世紀後半であつたと考えられる。十九世紀以降の欧米では自らの文化にはない図柄や文様を彫師と客がともに積極的に取り込む動きが見られたが、各港を結ぶ定期的な国際

航路がひらかれ、日本の各港も寄港地となる、港と彫師、外国人観光客の観光行動がさらに強く結びつくようになる。十九世紀後期には皇族、富豪、貴族などのセレブリティや観光客、軍人などが、日本でイレズミを入れたが、それは希少性や旅の記念、「見せびらかし」を意味した。こうした人々は、客船や軍港が恒常的に寄港、停泊する港で、彫師の客となりイレズミを入れた。こうした背景のなか、「日本みやげ」としてのイレズミが横浜、神戸、長崎などで客に求められるようになったと考えられる。

一方で、日本においては法的規制を背景に、すでに彫師が営業を始めていたヨーロッパ、東南アジアなどの港に日本の彫師も出稼ぎするようになる。港では恒常的に仕事があり、外国の港で働く日本人彫師たちは「日本ならではの技術」を駆使することが期待されており、それが客を惹きつけたのである。また、外国であれば堂々と宣伝もできたので、欧米や東南アジア各地、香港において日本人彫師の新聞広告が残されている（山本二〇一七）。こうした文脈からみれば、彫千代は世界的に形成されつつあった商業的なイレズミ施術のネットワークに日本が組み入れられていった時代の申し子のような存在であったと考えられる。

その上で、国内事情の文脈に照らし合わせながら日本みやげのイレズミの性格を考察したい。日本の陶器を体系的に収集したエドワード・モース（Edward Sylvester Morse、一八三八年—一九二五年）が

記したように、一八八〇年代半ばにはすでに当時日本の工芸は、国内向けのものと、「ヨコハマ・ムケ」（横浜向け）と軽蔑的に呼ばれた「外国貿易の為のもの」があった。モースによれば、日本からの欧米輸出向けの陶器は胸が悪くなるほどゴテゴテした装飾を書き加ぐるものであった。その注文の仕方も「出来るだけ沢山の赤と金とを使い」というもので、「そして製品の——それは米国と欧州とへ輸出される——あわたださと粗雑さとは、日本人をして、彼等の顧客が実に野蛮な趣味を持つ民族であることを確信させる」とも述べている（モース一九七一第三卷二二—二二頁）。

イレズミも同じ状況にあり、日本人向けと横浜向けに分かれていたと考えられる。専ら日本人を客とする彫師と、彫千代のように外国人客に特化した彫師と、彫宇之のように日本人と外国人客を手がける彫師がいたと考えるほうが自然である。ただし、ほとんどの彫師は、日本の顧客に「毛唐にも施術している」との評判が立つことと逮捕を恐れて、外国人への施術を口外しなかったと考えられる。

彫千代は、日本人の好みとは言い難い凶柄や彫り方をしてきた可能性がある。有島は自らが収集した彫千代の下絵を評して、「横濱向」という言葉を用いている⁶⁴。ロングフェローらの身体や腕には、確かに当時日本人には好まれていなかった「抜き彫り」が彫られている。一九二〇年代から四〇年代にかけてイレズミの研究をした谷井基次郎、玉林晴朗は、ともに彫千代の作品を「あまり良い

とは思わなかった」などと述べている（玉林一九三六、谷井一九二八b、c）。ただし、玉林は東京の鳶や職人を中心に取材してきた人物であり、彫千代への評価は取材した地域の人々の好みを反映していると考えられる。また、谷井も具体的な理由を挙げず、先入観からの評価であつた可能性がある。

日本の彫師側からみれば、「日本みやげとしてのイレズミ」は、旧来の絵師や彫師の世界と欧米を中心とした外来の人々、文化、情報が混交したことから生じた側面もある。たとえば、後に初代彫芳となる通称「麻布の提灯屋」の黒沼鼎かまゑは、江戸の治安を守る八丁堀の町方同心の子孫で、歌川豊国の流れを汲んでいた絵師でもあつた。初代彫芳は腰の関節に障害があつたこともあり、親から勧められて浮世絵師の歌川国貞の弟子である歌川国虎より幼い頃から絵を習つた。明治時代に入ると表商売として風の絵や万灯の絵を描いていたと二代目彫芳でもある息子の黒沼保は語っている⁶⁵。

幕末から明治への急速な変化にあたり、「藩主お抱え」の絵師や職人は、絵画、工芸品の需要がなくなり、外国人向けの土産物、美術製造品の生産に転換していった。近年、「超絶技巧」として紹介されることの多い美術工芸の一部は外国人向けに作られて輸出もされたが、多彩な色で彩られ大仰な装飾が施されてもいる⁶⁶。町場の職人である彫師の仕事も、こうした時代の変化を受けていたであろうと考えられる。

すでに指摘したとおり、十九世紀後半から二十世紀前半に生じた外国人向け施術は、欧米のタトゥーブームに乗つてもいた。明治時代においては、条例や法律で裸体姿を規制された東京や横浜などの市街地を除いては、日本人で主要客層であつた人々もふんどし姿のまま仕事をしており、この人々や彫師は「生きる見本帳」でもあつた。日本人彫師側には、施術の禁止や従来生業としていた仕事の需要が見込まれなくなり、外国人向けの需要に応じる必要があつたであろう。観光業という面からみれば、時には彫師自身が外国人客に売り込み、別当、美術商、ホテルのボーイが彫師と客をつなぐ役割を負つた。ホテルなども美術商を通じて彫師を紹介した。当時、外国人客が宿泊するホテルの多くが外資系であり、ホテルも宿泊客サービスとして、問い合わせがあれば彫師を紹介したと考えられる。こうした「もてなし」の前提となる状況には、外国人の施術は、日本政府や警察の手の及ぶところではないと考えられていたことが挙げられる。客自身にとつても、イレズミは好奇心を満たす体験であつた。日本のイレズミ文化に関心をもつ欧米人たちは、日本のイレズミを芸術と見なし、彫師を芸術家ととらえていた。彫師側も外国人向け図柄を用意したため、滞在費用や滞在日数から大きな図柄を入れることはかなわない客も、数時間から一日程度でその一端を体験できた。

観光学では「真正性」を問うことはすでに古典的な議論となつて

いるが、当時の外国人客が日本で日本人彫師からイレズミを彫ってもらうことは、やはり真正性を感じさせる行為であったことを指摘しておきたい。欧米ではジャポニズムブームは続いており、イレズミを持ち帰ることで自慢を交えて旅の思い出を語ることができる。

図柄は地元で彫るものときほど変わらなくとも、同時代の欧米の記録や写真から判断するに、技術や仕上がりにおいては日本の彫師の仕事は格段に上回っていた。まだ日本が東洋の神秘に包まれている時代に、現地の彫師が彫った「真正なイレズミ」は痛みを伴いながらも客を満足させたであろう。

十九世紀後半から二十世紀初頭の日本みやげのイレズミは、こうしたさまざまな事情や背景が交差して出現した現象であった。交通網と外国人客向けホテルや滞在先が整備され、観光ルートとして整うなかで、イレズミ体験サービスが成立していた。つまり、この時代のイレズミ体験とは、当時の日本人と一部の外国人が組んで、外国人客に提供した「あらかじめ設定された場での実演」であった。ホスト側が「ショーケース」的施設や空間をつくって、ビジター側の体験内容や質、人数調整を含めて観光客を囲い込む現象は、一般住民と外来の客の摩擦を避けるために現在にもよくみられることもある。彫師業は当時禁じられていたので、彫師側も外国人客に家や仕事場に直接来られて目立つのは困る。このため、彫師が客のホテルや船を訪問する形や、美術商が用意したタトゥールームでの施

術となったといえよう。

この現象はまた、開港によって十九世紀後半には日本も「みやげ」としてのイレズミ」の世界的に広がるネットワークに組み入れられたことを示す。実は、日本だけにこの現象が生じたのではない。

CaplanらやFriedmanの研究が示すように、大航海時代から欧米では各地でイレズミを彫り、縁起を担ぎ、みやげや記念とする人々がいた。イレズミができる港として、横浜、神戸、長崎が組み入れられたのである。さらに、日本人彫師は各地の港に住み着いている。一九三〇年代までに日本人彫師が外国で開業した都市は筆者が資料で確認しただけでも、香港、上海、芝罘^{ヂイフイ}、シンガポール、バンコク、マニラ、ボンベイ（現、ムンバイ）、カルカッタ（現、コルカタ）、ラングーン（現、ヤンゴン）、サンフランシスコ、バンクーバー、ニューヨーク、リヴァプール、ロンドン、マルタとなる。外国在住の彫師たちの存在は、外務省が各領事館で実施した在住日本人の職業統計「海外在留本邦人職業別人口調査」などに、一九〇七（明治四十）年から一九一二（大正元）年に残されている。職業調査は各領事館が独自に実施していたのだが、一九一三年以後に外務省が調査項目を統一すると、海外在住の彫師数は捕捉できなくなる。彫師たちの動向は、ジャーナリストの宮武外骨も着目しており、一九二四（大正十二）年に刊行した『面白半分』の記事「文身の女」で、次のように指摘していた。

文身は野蛮の遺習として、徳川幕府の末及び明治の代となつて以来、法律で厳禁されて居るにも拘らず、陰に行はれて其術を業とする者少くない、特に諸外国人は好んで日本式の文身を施すさうである、『官報』に「海外在留本邦人職業別」と云ふ統計表が載つて居たが、何国何市にも日本の「文身」が数人ある、野蛮と呼ばれる事が、文明国で盛んに行はれて居る事が分る。

こうした彫師のなかには、積極的に地元の英字新聞などに広告を出していた彫師もいる。世界的にみても、各港にはイレズミ屋が軒を連ねており、港から内陸へと店舗が広がっていた。さらには、店舗を持たずに旅まわりをする彫師もいた。こうした状況を踏まえ、彫千代は宣伝で異彩を放つたが、むしろ移住や出稼ぎして世界各地で開業した日本出身の彫師たちと共通する宣伝手法や言動でもあつたと指摘できる。またこれは、英国系美術商と組んだことで得た知識であつたと考えられる。

イレズミは文化や国境の境がなく、どん欲に新しい要素を取り入れていくが、たちまちに流行が過ぎ去つて陳腐化する。トランスナショナル的であり、トランスカルチャーな文化でもある。ほとんどの場合、施術回数が一回で総施術時間も短い。みやげとしてのイレズミの共通性は、イレズミに関する人と文化と美術の交換が世界各

地で同時に展開している状況から生じている。イレズミにおける文化の接触と混交は、十九世紀に入ると本格化し、二十世紀後半には欧米におけるタトゥー専門雑誌の定期刊行、さらにインターネットとSNSの登場で加速している。今回、本論文で確認したのは、日本の彫師が世界的に形成されつつあつた「彫師とその客」のネットワークに参入し、組みこまれていった最初期の状況であつた。

八 結 論

本稿では、日本の彫師たちが十九世紀後半以降、外国人の施術を通していかに命脈を保ってきたのかを国内、国外の資料を検討して考察した。法的規制をかくぐつて施術をしてきた日本の彫師、特に彫千代が活躍できた時代の横浜の港とホテル周辺的位置関係、仲介者、広告・宣伝のあり方について分析した。

当時の日本ではイレズミの施術は法的に規制されていたが、外国人客を取り込むことによつて、日本の彫師業は命脈を保った面があるといえよう。一九四五年以前において、イレズミに関する記事は日本の新聞、雑誌では時たま掲載されるが彫師逮捕の報道が中心となり、宣伝などは不可能であつた。国内で刊行された英字新聞も、広告は載っていない。東南アジアでは英字新聞に日本人彫師の広告が掲載されたが、日本で彫師の広告媒体として機能したのは旅行案

内書やホテルなどの広告欄や、自身が配布したビジネスカードであり、すべて英語で書かれた外国人客向けであった。

本稿では、日本におけるみやげとしてのイレズミを時系列で辿って行った。明治政府成立当初はすでにイレズミを彫っていた人々は鑑札を渡し、国内では施術を厳しく取り締まった。しかし、徐々に取り締まりが緩み、施術を受ける人々が増えていく。英国二皇孫の施術については、政府は事実上黙認し、彫師を世話すらし。彫師の一部は港付近のタトゥールームや東京、横浜、箱根、神戸などの外国人向けのホテル、船上などで施術をおこなうようになる。さらに、外資系美術商と提携するなどして、外国人向けの観光案内書やホテルのメニュー裏などに広告を掲載する美術商や彫師も現われた。一八九三（明治二十六）年頃には、到着した船内に物売りが押しかけたように、彫師自らホテルや船室に向いて注文を取り、彫ることもあった。国内よりも外国で有名であった彫師の彫千代の名は死後も語られ続けて、特に英語圏においては実像よりも虚像が大化するが、一九〇六（明治三十九）年以降は、英米の新聞や雑誌で日本での施術体験が紹介されることが少なくなる。また、この時代に日本のイレズミ技術や特徴的な彫り方、図柄への世界的な高い評価が確立したものと考えられる。

今後は、国外編として彫師ほかの彫師についてまとめる予定である。筆者は東南アジアで活動した日本人彫師の資料も集めており、

別稿を準備中である。また、科研費により彫千代の下絵に関する報告書を二〇二一（令和三）年度内に刊行予定である。

外国人向けの施術は、一九四五（昭和二十）年以降、再び盛んとなり、GHQや米軍ほかの軍人が主要な客となっている。一九七〇年代から米国の彫師が来日して彫師や客との交流を始め、一九九〇年代頃には世界各地の客が日本に通い始めた。現在も年に一度か二度ずつ彫師に彫ってもらう目的で日本を訪れる人々がいる。日本式の手彫りにこだわる人々は、毎年最低二週間程度は滞在し、日本製品と各種資料を買い込んでいく。近年では、彫師たちはサイトを開設し、各種のSNSにより連絡が取りあえ、打合せもできる。見本帳はSNS上でも展開し、彫師自身や客が、下絵だけでなく身体に彫ったイレズミを写真に撮影してSNSにアップするようになっていく。客はより多国籍化して、作品や彫師との感性が合うかどうかを優先し、都市や地方在住に関わらず彫師のもとを訪れている⁶⁸。Covid-19もあり、今後のインバウンド観光や日本社会、世界がどこに向かうかの見通しがつきにくいのが、二十一世紀型の「日本みやげ」としてのタトゥー⁶⁹は今なお静かに展開している。以上の歴史を踏まえると、本論は日本を舞台としたイレズミをめぐる観光行動の原点を検討したものと位置づけられるであろう。

謝辞

本論考はすべて筆者の文責にあります。脱稿までにはさまざまな機関や個人に協力していただいており、特に以下の方々や機関の名を記して感謝いたします。

小山騰氏には、二〇一二（平成二十四）年にケンブリッジ大学図書館にて資料調査の手ほどきをいただきました。都留文科大附属図書館には、各図書館への紹介状、資料の取り寄せ、国会図書館のデジタル資料閲覧などの便宜をはかっていただきました。参代目彫よし氏には、文身歴史資料館や個人コレクションを拝見させていただきました。彫千代像やならびに当時のイレズミと下絵ほかの解釈のアドバイスもいただきました。大貫菜穂氏には、芸術学からみた彫千代とアーサー・ボンドの評価をご教授いただきました。エセックス大学のMat Loddar氏には、英国美術史研究とタトゥーの位置づけ、近現代におけるイレズミ業の発展、図柄を含めた美術的、文化、歴史について常に情報交換をいたします。Amsterdam Tattoo Museum（当時）、オックスフォード大学図書館、ケンブリッジ大学図書館、香港歴史博物館、香港中文大学図書館、香港政府歴史檔案館、台湾・中央研究院民族学研究所図書館、公益財団法人平野政吉美術財団、秋田県立美術館、日本近代文学館、長崎歴史文化博物館においても、関連する資料を閲覧させていただきました。長崎大学附属図書館、横浜市発展記念館、Peabody Essex Museum、Langfellow House、The Penn Museumには、所蔵する資料の掲載許可をいただきました。二〇一八年から公募班に採用していただき、領域会議などで度々発表の機会をいただきました「顔・身体学」の皆様にも御礼申し上げます（順不同）。

本論文はこれまでに以下の科学研究費の助成を受けました。

20H04583 「イレズミ・タトゥーにおけるトランスカルチャー性の比較研究」

（二〇二〇年度～二二年度 新学術領域研究〈研究領域提案型〉）

18H04202 「顔・身体表現から検討するトランスカルチャー下の装飾美」（二

〇一八年度～一九年度 新学術領域研究〈研究領域提案型〉）

24520165 「明治期・大正期・昭和期に国内外で活動した彫師に関する実証的研究」（二〇二二年度～二〇二八年度 基盤C）

注

- (1) 後述する京都の彫安こと Nakashima（中島）のことと考えられる。
- (2) 井出英雅『やくざ覚え書』東都書房、一九五八、四〇頁。
- (3) 一九九七（平成九）年四月二十三日、五月十三日に自宅にて清宮武三氏より伺った話をまとめた。詳しくは、拙著を参照のこと（山本二〇〇五：一五三頁～一六六頁）。
- (4) 二十六枚の下絵や針は、オックスフォード大学ピットリバーズ博物館に収蔵され、公式オンラインコレクションで写真が閲覧できる。公式サイトは「<https://www.prim.ox.ac.uk/collections-online>」（二〇二〇年八月一日最終閲覧）。
- 脱稿後に、ゴerlandが一九〇二年にも大英博物館に針はカイレズミの道具一式を寄贈していたことを、館から問い合わせがあったことで知った。
- (5) 四署は現在の中央警察署、三署は現在の築地警察署、一署は現在の深川警察署にあたる。
- (6) 田中裕二「第五章 日本人の『はだか』——西洋人のまなざしと東京違式 註違条例」、矢内賢二編『明治、このフシギな時代』新典社、二〇一六、一八八頁。
- (7) ジョージ五世はジョージ六世（一八九五年～一九五二年）の父君で、エリザベス女王（一九二六～）の祖父にあたる。
- (8) 臨時帝室編修局編「長崎省吾第一回談話速記」一九二七。国会図書館憲政資料室に所蔵され、デジタル公開されている。<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1096290?oc=Opened=1>（二〇二〇年七月二十六日最終閲覧）
- (9) 延遠館は浜離宮恩賜公園に所在した当時の迎賓館である。江戸幕府によって建てられた西洋式内装がある建物であったという。

- (10) 長崎は神奈川県令をしていた中野健明に問い合わせた、と表現しているが、国立公文書館アジア歴史資料センター「地名・人名・出来事事典」によると、中野の県令着任の年代が合わないので記憶違いであろう。ゆえに、呼び寄せた彫師は、横浜や神奈川県内の者とは限らないことを指摘しておく。 https://www.jacargo.jp/dictionary/02_item.html?id=00025834 (二〇二〇年十月十九日最終閲覧)
- (11) 英国二皇孫が著者、注釈がダルトンとなっているバックアント号航海記、Prince Albert Victor et al., 1886, *The cruise of Her Majesty's Ship "Bacchante" 1879-1882*, Macmillan and Co, London では、八月二十七日朝食後にも施術を受けたことが読み取れる。二人はそのあと朝九時三十分に着替えて、明治天皇の訪問に備えた。十月二十八日午前九時三十分には彫師が延遠館の居室に通され、三時間ほどで施術を終えた。先に墨汁で下絵を描いたあと、青と赤で大きな龍を彫ったと記されている。彫師は二名いて、一人は色を調整し、一人が彫った。彫師は全身に日本風の色彩豊かな美しいイレズミを施していた。他、二名の彫師が軍艦に乗り込み、二、三日かけて英国の將兵数名の腕を彫った。なお、ジョージ五世の伝記を執筆した君塚直隆によれば、二人の感想は「ちつとも痛くなかった」そう同日夕刻には芝公園での日本式晩餐会に出席した。バックアント号は神戸に寄港し、二皇孫は京都と奈良を観光したのち、瀬戸内海から下関を抜けて十一月十五日に日本を発った(君塚二〇一〇:二〇四頁-二〇六頁)。
- (12) 一九二八(昭和三年)に日本のイレズミに関する複数のレポートを執筆した谷井基次郎は、「大阪難波(だと思ふ)現在の彫熊——今(筆者注:一九二八年?)、神戸にいる彫安の師匠を探し出して京都で某画伯の筆になる。鶴舞ふの図をエドワード親王、上り龍下り龍をジョージ親王の御腕に彫つてさしあげた」(谷井一九二八:六〇頁-七八頁)と述べている。ほかに、官僚が仲介して東京出身で京都在住であった彫師の江戸熊が施術をしたと報じた京都の新聞記事を、高久が紹介している(高久二〇一一:一六六頁
- 一一七頁)。
- (13) 英国の *Daily Mail* の公式サイトほか日記の該当箇所の写真を添えて、二〇一九(令和元年)年十一月十二日に“The royal with the dragon tattoo forms part of palace exhibition”で報じている。 *Prince George's diary recorded being tattooed in Japan*. (Royal Collection Trust/Her Majesty Queen Elizabeth II 2019/PA). 日記は二〇一九年にバックキングダム宮殿に展示された。
- (14) 京都の花街である島原のことであろう。
- (15) 羽成恵造編『學術政談演説討論集』(上田屋、一八八七)ほか。
- (16) 小山騰の著書(二〇一〇)には、十九世紀から二十世紀までのイレズミがある王室関係者や貴族、日本でイレズミを入れた英国王室関係者や英国貴族が列挙されている。
- (17) 本論では深く立ち入らないが、露国の皇太子であったニコライが長崎で施術を受けている。一八九一(明治二十四)年五月に軍艦で寄港した際に、長崎市摂津町の野村幸三郎、大黒町の姓不詳、又三郎を呼び寄せて、右腕に龍のイレズミを彫ったという。二〇一九(令和元年)年八月九日にテニス中の腕まくりをしたニコライ二世の姿を撮影したデジタル着色写真が雑誌『Esquire』の日本公式サイトで紹介された。「最後のロシア皇帝、ニコライ二世——右腕には日本で彫った見事な龍の刺青が…」『Esquire』公式サイト <https://www.esquire.com/jp/entertainment/rw/a3032892/russia-last-tsar-nicholas-had-a-massive-dragon-tattoo-japan/> (二〇二〇年十一月九日最終閲覧)。
- (18) 早川勇「チェンバレン『日本事物誌』の各版にみられる日本語語彙」『言語と文化』九号、二〇〇三、一四二頁。
- (19) Tattooing の日本語の発音は *Te-zumi* ではなく *Hori-mono* と示している。
- (20) 書誌情報は、こちらのサイトが詳しい。神崎順一「B・H・チェンバレン『Things Japanese』『日本事物誌』書誌」『Net Pinus』八七号 https://mynp-maruzen.co.jp/timewitbook/pinus_87_1-0/ (二〇二〇年七月二十四日最終閲覧)
- (21) Basil Hall Chamberlain, 1939, *Things Japanese*. London: John Murray, pp. 399-

- (22) 有島生馬の未完小説「彫千代」によれば、二代目は弟子の彫清の可能性がある（有島一九二四）。
- (23) 彫千代は小説家や漫画家の想像力を刺激するところがあり、いくつかの小説や漫画が書かれている。そのうち、死去してから比較的近い時代に取材に基づいて書かれたのが、画家で作家であった有島生馬の小説「彫千代」である。『婦人世界』一九二四（大正十三年一月から五月、八月から十月に連載したが小説は未完となった）。
- (24) *New Castle Courier* の短信記事（一八八六年三月十二日）を参照した。
- (25) 短信記事 *Freeport Daily Journal, Illinois*. 19 March 1886.
- (26) 横浜の彫師である参代目彫よしによると、図2にあるロングフェローの腹部の図柄は、幕末の絵師、狩野一信による「五百羅漢図」の第五十九幅図にある蛇の口から五百羅漢が現れる構図を、龍と観音に変更したものである。背中の鯉、観音と龍、右肩にある渦は米国で彫った可能性が高く、線がずれており素人の施術とのことである。Guth の記述と写真の撮影年代クレジットとの食い違いは、Covid-19 の状況下で本論文を執筆したため、資料所蔵機関である Longfellow House での確認ができなかった。
- (27) Julie Joy Nootbaar, 2015, "Charles Longfellow's Twenty Months in Japan," 『大分県立芸術文化短期大学研究紀要』五二巻、一三頁。
- (28) セーラムのビーボデー・エセックス博物館 (The Peabody Essex Museum) に問い合わせたところ、ウエルドが収集した和紙に描かれたイレズミ下絵が一九九八年に寄贈され、計四点収蔵されていることが判明した。うち一点は、ロングフェローの腹部の図柄に酷似している。江戸東京博物館での公開時には Horicho (彫長) が描いた下絵の可能性があると解説されている。江戸東京博物館編『日米交流のあけぼの——黒船きたる…全米最古ビーボデー・エセックス博物館の日本コレクションから』江戸東京博物館、一

九九九 一四九頁、一七一頁—一七四頁より。

- (29) "A mysterious 19th-century tattoo artist, identified at last," *Boston Globe*. 25 May 2015. <https://www.bostonglobe.com/ideas/2014/05/24/mysterious-century-tattoo-artist-identified-later/?hpid=hp%2Fnews%2F50BDK00%2Fstory.html> (二〇二〇年七月二十五日最終閲覧)
- (30) 詳しくは博物館公式サイト of Alessandro Pezzati による解説記事 "Furness in Bodno and East Asia" を参照のこと。 <https://www.penn.museum/sites/expedition/furness-in-borneo-and-east-asia/> (二〇二一年四月十五日最終閲覧)
- (31) *Furness, Harrison and Hiller expedition records 1060*. http://dla.library.upenn.edu/dla/ead/ead.html?fq=repository_facet%3A%22Penn%20Museum%20Archives%22&id=EAD_upenn_museum_PUMu1060 (二〇二一年五月十六日最終閲覧)
- (32) Adria H. Katz, 1988, "Borneo to Philadelphia: The Furness-Hiller-Harrison Collections," *Expedition Magazine*, vol. 30, no. 1. <https://www.penn.museum/documents/publications/expedition/PDFs/30-1/Katz.pdf> (二〇二一年六月九日最終閲覧)
- (33) 一八九六（明治二十九）年十一月十二日付『大阪毎日新聞』掲載記事「彫千代の刺青術」によれば、仕事場には機械彫りの装置を備えていたほか、ロングフェローを手掛けていると述べている。以下、引用する。「歯科医のような高低自由な椅子とその傍らに高さ三尺あまりのデスク形の機械がある。正部に数百の銀の棒がありこれに数本の鉄針を備え、細き線を描くには二本より三本、四本と順に針数を増しボカシに用いるものはその針五〇乃至六〇に及ぶ。その中部には刺青に用いる顔料及び紙類ベスリン等を備える。場の四壁には大鏡を懸け反射の作用にて一見全体の各部を知るを得べし。大鏡と大鏡の間には彫千代が技術を施せる姿を撮影した写真を懸げ、一見見る者を驚かすは英国皇族ビクトルおよびジョージ殿下の雲龍と蝶類、英国貴族ロードクレックホード侯の千羽鶴、米国詩家第二世ロングフェ

ロー氏の関ヶ原陣揃えの図、英国貴族ロードレスター侯が婦人の肖像を刻める（中略）元来彫千代なる者は非凡な視力を有し米国婦人の左腕に彫る七賢人の如きは大きさ郵便切手と同じく肉眼には弁じ難き（中略）多きは英米人これに次は露仏人なり尤も近來米国婦人の依頼多く刺図は蝶に群雀、良人の肖像（中略）此程米国の一婦人が左腕に蠅の留れる図を彫りたるが其大きさ（中略）真物と為す者多きより同婦人は大いに誇りあるよしと。此蠅の価は三五弗にて施術料は一図一五六弗の物も有れど多くは四五〇弗より二三〇弗に及び（中略）米人ロングフェロー氏が背部に彫らせし関ヶ原の図などは成功まで凡そ四〇日も掛り一日三時間卅弗の日当なりしと云へり」。この記事ではロングフェローのイレズミは関ヶ原の図と語られており、写真と異なる。

(34) 「日本村」のために渡航した俳優の市川達造、力士の熊ヶ谷こと辻与一、千鳥川こと宮本浪之助が帰国後に長崎の『鎮西日報』に体験を語り、一八八七（明治二十）年五月十六日から『鳥取新報』に転載された記事を倉田は参照している。筆者は『鎮西日報』の元記事を確認したが、倉田の引用箇所以外に関連する記述は存在しなかった。

(35) 筆者が調べた範囲で、香港在住の日本人彫師関連の新聞記事としては、“A Japanese Professional Tattooer,” *St. James’s Gazette*, 18 April 1889 が最も古い。

(36) 彫千代が英国軍艦での施術はともかく、英国二皇孫の施術を引き受けるには当時二十二歳前後と年齢的には若すぎることを指摘しておく。

(37) “The apelles of Japanese tattooer,” *Pall Mall Gazette*, 7 May 1889. 数日後の五月十三日には同じ記事が“Hoti chyo”と題して、*The London and China Telegraph* に掲載された。

(38) Gambier Bolton, “Pictures on the Human Skin,” *Strand magazine: an illustrated monthly*, April 1897, pp. 425–434. 彫千代が主張するように、日本近代文学館収蔵の下絵は絹本に縦横一センチ程度の蝶をはじめとして繊細な図柄が描かれていた。

(39) さまざまな資料を検討したが、彫千代自身が海外に渡航することはなかったと考えられる。

(40) 『日本旅行案内』は、当時の最も有名な外国人向け旅行案内書である。一八八一（明治十四）年から一九一三（大正二）年にかけて九版を出版した初版と第二版までは在日英国大使館職員であり同時に日本研究の基礎を作ったアーネスト・サトウが執筆を手がけ、横浜のケリーアンドウォルズ社が出版した。第三版からは、東京大学の教授で日本研究者であるチェンバレンが執筆を担当し、ジョン・マレー社のシリーズとして出版した（長坂二〇一〇）。

(41) 日本製タバコケースのコレクターが、Arthur Bond の広告を一九一一年から一九一四年まで年代別にサイトで紹介している。一八九四年以降の広告にはタトゥールームの案内がなくなる。Smoking samurai. http://www.snokingsamurai.com/ARTHUR_BOND.html (二〇二〇年十一月二十九日最終閲覧)

(42) 同紙の翌日付記事に著者として Robert H. Davis の名前が挙がっていた。

(43) The California Digital Newspaper Collection を参照した (public domain)。
(44) 最初にサイマル出版会から出版された版を引用した。朝日新聞社に文庫で収録された際には翻訳は「彫師」と修正されている。原本を確認したところ、Hoti と彫師が示されていた。

(45) 訳本には、一円はオーストラリア・ハンガリー金貨六枚に相当すると、解説されている（コジエンスキー著・鈴木文彦訳 一九八五・六頁）。横浜グランド・ホテルの宿泊費は四円、ガイド料は一日一円に交通費を加えたものと説明されている。

(46) 赤川は、日本海軍の根拠地、横須賀・呉・佐世保・舞鶴にも彫師がいて秘密裡に営業しており、近來は海軍軍人、船員に流行っているとも語っていた。ただし、赤川のこの談話を裏付ける資料は、筆者は現段階では目に見えていない。

- (47) 当時七十八歳の鈴木甚五郎。
- (48) 当時七十三歳の戸部米吉。
- (49) 東京朝日新聞社編『郷土秘史横浜開港の頃——夜明け前の日本を語る 附・よこはま外人墓秘話』横浜郷土史編纂所 一九三六、九二頁。
- (50) Frederick Diodati Thompson, 1893, *In the track of the sun: Readings from the diary of a globe trotter*. New York: D. Appleton, pp. 45-46.
- (51) 日本近代文学館にも、有島生馬の小説「彫千代」関連資料として同じ写真が収蔵されている。長崎大学附属図書館所蔵の写真の被写体男性の胸元には、他の写真にはなら「HORI CHYO」とのやこもない文字が見える。これは撮影後に書き込んだものと判断できる。ちなみに、腹部の文字は「歳よつて いらぬものとは思えども よんどころなく薦のぼるへい」という狂歌である (Yokohama Tattoo Museum ed. 2008 : 四頁)。
- (52) 「長崎大学附属図書館 幕末・明治期日本古写真データベース」<http://oldphoto.lib.nagasaki-u.ac.jp/jp/>にて「刺青姿の男性 (1)」とのタイトルで公開されている。目録番号: 1755、撮影者は鈴木真一 (二代目)。
- (53) 「ほりゆうの物語 彫字への記念ホームページ」<https://popniami2005.web.fc2.com/horiyunohim> (二〇二〇年七月二十四日最終閲覧)
- (54) 英文新聞記事 “A Japanese tattooer.” *Liverpool Mercury*, 26 December 1891 を訳出した。同記事は、一八九一 (明治二十四) 年十二月ごろに英国各地の新聞紙に “Japanese tattooing.” などのタイトルで掲載されていた。
- (55) ニューヨークの雑誌に掲載されたタトゥー特集記事に定番的に掲載される写真をもとに描き起こした挿絵が並ぶ記事では、日本人の若き彫師として Chimo がふつと述べられている。“Tattooing their arms, back and breasts is the latest queer fashionable fancy of English royalty.” *New York Journal*, 24 January 1894.
- (56) 英国の新聞 *Kingson Gleaner* の一八九七 (明治三十) 年三月二十三日の記事によると、日本人彫師 Chio がサザラランド・マクドナルドのもとで働
- いていると述べられている。この日本人彫師は Hori Chio の可能性がある。“A tattooer.” *Kingson Gleaner*, 23 March 1897.
- (57) “On Tattooing.” *The Newcastle Weekly Courant*, 5 November 1898.
- (58) “Figured skills The Latest Fad.” *The San Antonio Daily Express*, 6 February 1898. が、筆者が確認した限りの初出の記事である。その後 “Up-to-date Tattooing.” と題して一八九二年二月以降米国の各新聞に転載される。
- (59) 詳しくは、小山二〇一〇: 二二九頁—二三二頁を参照されたら。
- (60) George Burcher, 1958, *Memoirs of a Tattooist: From the Notes, Diaries, and Letters of the Late King of Tattooists*. London: Pan Books.
- (61) 英国の研究者である Mart Loder への二〇一九年三月のインタビューによると、二十世紀初頭のロンドンで専門職を名乗る彫師は三名ほどしかいなかったという。この状況は、当時の新聞広告でも裏づけられる。一方で日本の状況は式亭三馬が一八一〇 (文化七) 年に書いた『腕雕一心命 (うでのほりものいつしんいのち)』で彫師が専門職として歌川国満による挿絵で描かれている。一九三〇年代に彫師を研究した玉林の著書『文身百姿』では、幕末より昭和初期までに江戸、東京を中心にした彫師が挙げられており、さらに、小山の著書では他の文献から付け加え、計二十八名の彫師名を挙げられている (小山二〇一〇: 三三頁—三四頁)。
- (62) 当時の欧米で主流の図について、詳しくは R. W. B. Scurr and Christopher Gorch, 1974 を参照のこと。また、二〇一七年二月から四月にかけて、New York Historical Society で開催された企画展 Tattooed New York の公式サイトとブログにおいても、当時の下絵ほかを閲覧できる。 <https://www.nyhistory.org/exhibitions/tattooed-new-york>
- (63) エドワード・モースは、一八七七 (明治十) 年、および一八七八 (明治十一年) 年から七九 (明治十二) 年に滞在した米国の動物学者である。
- (64) 有島の記述によれば、下絵自体が「横浜出来」のみやげものとされており、たことが窺える。有島が入手した彫千代の下絵には、当時の横浜でみやげ

として売られていた着色写真のアルバムと同様の菊花が描かれた漆板の表紙がつけられていた(有島一九二四)。

- (65) 日本経済新聞社文化部編『日本人の手』日本経済新聞社、一九六三、一九一頁—二〇〇頁。

- (66) 山下裕二監修『明治の細密工芸 驚異の超絶技巧!』平凡社、二〇一四、ほか。

- (67) 宮武外骨「文身の女」『面白半分』半狂堂、一九二四、九四頁。

- (68) Rebecca Scales, "Taroos in Japan: The eye-watering art thousands cross the world for." 8 October 2019. <https://www.bbc.com/news/world-asia-49835314> (二〇二〇年七月二十七日最終閲覧)

参考文献

有島生馬

- 一九二四『彫千代』『婦人世界』(大正十三年一月号から五月号、八月号から十月号に掲載)

イザベラ・バード著、金坂清則訳

- 二〇一三『完訳 日本奥地紀行』全四巻、平凡社 (Isabella L. Bird, 1880,

Unbeaten Tracks in Japan: An Account of Travels in Interior, Including Visits to the Aborigines of Yezo and the Shrines of Nikkō and Ise, 2 vols., London: John Murray)

バジル・ホール・チェンバレン著、高梨健吉訳

- 一九六九『日本事物誌』全二巻、平凡社 (B. H. Chamberlain, 1939, *Things*

Japanese, London: John Murray)

フランツ・フェルディナント著、安藤勉訳

- 二〇〇五『オーストリア皇太子の日本日記——明治二十六年夏の記録』講談社 (Franz Ferdinand, 1895–1896, *Tagebuch meiner Reise um die Erde, 1892–1893*,

Wien: Holder)

飯沢匡

一九八八『異史 明治天皇伝』新潮社

経済雑誌社編

一九〇二『ほりもの』『日本社会事彙 下巻』(第二版) 経済雑誌社

一九〇八『ほりもの』『日本社会事彙 下巻』(第三版) 経済雑誌社

君塚直隆

二〇一四『ジョージ五世』日本経済新聞出版

ヨセフ・コジエンスキー著、鈴木文彦訳

一九八五『明治のジャポンス』サイマル出版 (Josef Kofensky, 1895,

Zapovska, Praha: Oro)

小山剛・新井誠編

二〇一〇『イレスミと法——大阪タトゥー裁判から考える』尚学社

小山騰

二〇一〇『日本の刺青と英国王室——明治期から第一次世界大戦まで』藤原

書店

倉田喜弘

一九八三『一八八五年ロンドン日本人村』朝日新聞社

チャールズ・A・ロングフェロー著、山田久美子訳

二〇〇四『ロングフェロー日本滞在記——明治初年、アメリカ青年の見たニッ

ポン』平凡社 (Christine Wallace Laidlaw, ed., 1998, *Charles Appleton Longfellow: Twenty months in Japan, 1871–1873*, Washington: Friends of the Longfellow House)

宮川基

二〇二〇『入れ墨をめぐる刑事規制の歴史』小山剛・新井誠編『イレスミと

法——大阪タトゥー裁判から考える』尚学社

エドワード・シルヴェスター・モース著、石川欣一訳

一九七〇—一九七一『日本その日その日』全三巻、平凡社 (Edward Sylvester

Morse, 1917, *Japan Day by Day*, Boston: The Riverside Press)

宗像盛久編

二〇〇〇『横浜開化錦絵を読む』東京堂出版
長坂契那

二〇一〇「明治初期における日本初の外国人向け旅行ガイドブック」『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』六九号

二〇一五「観光をめぐる近代日本の表象に関する歴史社会学的研究——探検紀行から旅行ガイドブックへ」慶應義塾大学大学院社会学研究科、博士論文

中野明

二〇一三『グローブトロッター』朝日新聞出版

二〇一六『世界漫遊家が歩いた明治ニッポン』筑摩書房

二〇一八『流出した日本美術の至宝』新潮社

アーネスト・サトウ著、長岡祥三訳

一九八九『アーネスト・サトウ公使日記(一)』新人物往来社 (Ernest Mason

Satow, 1900-1906, *The Diaries of Sir Ernest Satow*)

志澤政勝

二〇一五『横浜港ものがたり——文学にみる港の姿』有隣堂

ゴードン・スミス、荒俣宏・大橋悦子訳

一九九三『ゴードン・スミスのニッポン仰天日記』平凡社 (Richard Gordon

Smith, *The Japan diaries of Richard Gordon Smith*)

菅靖子

二〇〇四「日本の「美術製造品」を取り扱ったイギリス系商社」『デザイン学

研究』五一巻三号

高久嶺之介

二〇一〇「明治前期の京都とイギリス皇族——一八八一年の異文化交流」『異

文化交流史の再検討——日本近代の〈探検〉とその周辺』平凡社

高田義一郎

一九二八「文身」『人体の趣味と神秘』博文館

玉林晴朗

一九三六『文身百姿』文川堂書房

谷井基次郎

一九二八 a 「文身の研究」『江戸時代文化』第二巻第二号

一九二八 b 「日本文身考(上)」『グロテスク』第一巻第一号

一九二八 c 「日本文身考(下)」『グロテスク』第一巻第二号

渡辺京二

二〇〇五『逝きし世の面影』平凡社

山本真紗子

二〇一〇『唐物屋から美術商へ』晃洋書房

山本芳美

二〇〇〇「イレズミの近代史——日本、台湾、沖縄、アイヌにおけるイレズ

ミ禁止政策」昭和女子大学大学院生活機構研究科、博士論文

二〇〇五『イレズミの世界』河出書房新社

二〇一六 a 「イレズミと日本人」平凡社

二〇一六 b 「日本の彫師はいつから認められてきたのか」二〇一六年六月十

七日『SYNODOS』<https://synodos.jp/culture/17323/2>

二〇一七「香港の日本人彫師たち——十九世紀末から二十世紀初頭まで」『政

経論叢』八五巻三巻・四巻合併号

二〇二〇「日本のイレズミの歴史と現在——規制の時代をふりかえる」、小山

剛・新井誠編『イレズミと法——大阪タトゥー裁判から考える』尚学社

横浜開港資料館編

一九九六『世界漫遊家たちのニッポン』横浜開港資料館

横浜市役所編著

一九三三『横浜市史稿 風俗篇』横浜市

Christine M. E. Guth, 2004, *Longfellow's Tattoos: Tourism, Collecting, and Japan.*

University of Washington Press.

- Anna Felicity Friedman, 2012, *Tattooed Translurries: Western Expatriates Among Amerindian and Pacific Islander Societies, 1500–1900*. Ph. D Dissertation, University of Chicago.
- Julie Joy Nootbar, 2015, “Charles Longfellow’s Twenty Months in Japan.” 『大分県立芸術文化短期大学研究紀要』第五二巻
- Charlotte M. Salway, 1896, “Japanese Monographs,” *Asiatic Quarterly Review*, Vol. 2 No. 3/4, London.
- R. W. B. Scurt and Christopher Gorch, 1974, *Art, Sex and Symbol: The Mystery of Tattooing*. London: A. S. Barnes.
- Frederick Diodati Thompson: with many illustrations by Harry Fenn and from photographs, 1893, *In the track of the sun: Readings from the diary of a globe trotter*. London: W. Heinemann.
- Hui Wang, 2017, “The ‘Bodyscape’: Performing Cultural Encounters in Costumes and Tattoos in Treaty Port Japan,” *Global Histories*, Vol. 3 No. 1 <http://dx.doi.org/10.117169/GHSJ.2017.109>
- Yokohama Taroo Museum, ed., 2008, *Beauty and Violence Horichiyō: Ambassador of the Japanese Tattoo*. Yokohama: State of Grace Incorporated and Yokohama Taroo Museum.